HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大樹中学校調査報告書 ： 「地域学習」・キャリア教育の取り組みと中学生の地域アイデンティティ
Author(s)	浅川, 和幸
Description	平成31～33 年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（C）（研究課題番号 19K0246809）「人口減少時代における地方発参加型教育実践の比較研究による新しい中等教育原理の探究」研究成果報告書 1
Issue Date	2021-04-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90712
Type	report
File Information	03_asakawa_kaken_taikicho.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成 31～33 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）（研究課題番号　19K0246809）「人口減少時代における地方発参加型教育実践の比較研究による新しい中等教育原理の探究」研究成果報告書 1

大樹中学校調査報告書
「地域学習」・キャリア教育の取り組みと
中学生の地域アイデンティティ

令和３年４月

研究代表者　　浅　川　和　幸
（北海道大学大学院教育学研究院教授）

平成 31～33 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）（研究課題番号　19K0246809）「人口減少時代における地方発参加型教育実践の比較研究による新しい中等教育原理の探究」研究成果報告書 1

大樹中学校調査報告書
「地域学習」・キャリア教育の取り組みと
中学生の地域アイデンティティ

令和３年４月

研究代表者　　浅　川　和　幸
（北海道大学大学院教育学研究院教授）

目次

序章　はじめに――研究の意図と方法 …… 1
（1）研究の時代背景
（2）本研究におけるキャリア教育の理解
（3）これまでの研究の経緯
（4）本研究の方法とその特徴
（5）報告書の構成

第1章　調査結果の概要 …… 12
　第1節　地域と学校について …… 12
（1）生徒の人数と性別
（2）保護者の職業（主なもの）の特徴
（3）どのような学校生活を送っているか
　第2節　「大樹学」（ふるさと学習）の評価 …… 17
（1）「大樹学」の概略
（2）「大樹学」という参照点（「参考になったこと」）
　第3節　キャリア教育の評価 …… 22
　第4節　「大樹学」とキャリア教育の関係 …… 24
　第5節　大樹町の評価――大樹町の「良いところ」と「良くないところ」の理由づけの考察 …… 27
（1）大樹町の「良いところ」と「良くないところ」の単純比較
（2）大樹町の「良いところ」のラベルと他中学との比較
（3）大樹町の「良くないところ」のラベルと他中学との比較
（4）大樹町の「良いところ」と「良くないところ」のラベル比較
第6節　大樹町にいるから「できること」と「できないこと」 …… 36
第7節　生徒の将来の居住地志 …… 38
第8節　生徒の進路志向 …… 40
第9節　生徒の職業的将来志向 …… 41
第10節　生徒の将来生活志向 …… 42

第2章　調査結果の考察 …… 46
　第1節　生徒の地域アイデンティティの構造 …… 46
（1）大樹町の「良いところ」（ラベル）の関係
（2）大樹町の「良くないところ」（ラベル）の関係

（３）大樹町の「良いところ」（ラベル）と「良くないところ」（ラベル）の関係
①「良いところ」の主要３ラベルと「良くないところ」の２層の関係
②「良いところ」の度数の小さい２ラベルと「良くないところ」の２層の関係
（４）小括――地域アイデンティティの模式図
第２節　大樹町評価（３択方式）と地域アイデンティティの関係 …… 55
第３節　将来の居住地志向と地域アイデンティティ …… 56
（１）中学校卒業後の進路と将来の居住地志向
（２）中学校卒業後と高校卒業後の進路の関係
（３）ジェンダーの影響
（４）将来の居住地志向と地域アイデンティティ
第４節　「大樹学」（「ふるさと学習」）・キャリア教育と将来志向 …… 63
（１）進路志向と「大樹学」・キャリア教育の関係
（２）地域アイデンティティと「大樹学」・キャリア教育の関係
（３）将来の居住地志向と「大樹学」・キャリア教育の関係

第３章　まとめにかえて――キャリア教育を「人生探究」にバージョンアップする …… 70

謝辞

（資料）アンケート用紙

この報告書の元になった調査は、基盤研究（C）（研究課題番号　19K0246809）「人口減少時代における地方発参加型教育実践の比較研究による新しい中等教育原理の探究」を用いて行った。

序章　はじめに――研究の意図と方法

（１）研究の時代背景

この報告書では、「地域学習」（「大樹学」）と意欲旺盛な教員の下で「キャリア教育」を行っている大樹中学校の中学校３年生のアンケート調査（選択肢を答えてもらう形ではなく、記述式がほとんどである）をもとに、生徒の地域アイデンティティ[1]と両実践の関係を考察するものである。

なぜ、このような問題を 2020 年代の日本で中等教育段階の生徒研究として行うのかという点に関して、多少の説明が必要となるだろう。そしてこの説明は、戦後の日本の教育（戦後直後の教育が軌道修正されて現在の教育体制の基を築いたのは 1958 年であると考えられる）が、およそ 60 年間を経過して、その功罪が総括されることなく（「無反省」に[2]）、新たな教育体制に転換されようとしていることを、本稿なりの在り方で理解し、整理する形で行われる。

ところで本報告書は、平成 31～33 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（研究課題番号　19K0246809）「人口減少時代における地方発参加型教育実践の比較研究による新しい中等教育原理の探究」）を用いた調査を基にする。この科学研究費補助金で試みようとしている全体的な研究目的は、この教育体制の 60 年ぶりの大変更が中等教育の原理に関するものであり、それが生徒にとってもたらす意味を考え、今後どのような教育実践が重要となるのかを考えることにある。本報告書はその一部である。

全体的な研究目的を理解していただくためには、それを考えるに至った時代状況を概略的に説明しておく必要がある。ここでは時代状況を、日本社会の歴史的な転換とそれを背景とした教育体制の転換の 2 層に分けて説明する。

基層にある日本社会の歴史的な転換とは、2000 年代中盤以降、日本社会はそれまでとは「別のステージ」に突入していたのだが、それが 2020 年代初頭に明確となってきたことである。言わば、ディスクローズされた。そして教育体制の転換は、教育体制の惰性的な存続が様々の理由から不可能になり、60 年ぶりの教育体制の枠組みの改革として追求されるしかなくなったことである。多方面から限界が突きつけられていし、矛盾をもっている。60 年ぶりの教育体制の枠組みの「転換」は、「別のステージ」が教育に要求する課題に対する解答でもある。

---

[1] 地域に自分自身との気持ち的な一体性（例えば愛情）がもてること。

[2] ここでの「無反省」は道徳的なニュアンスをもっていない。例えば、受験体制と児童・生徒の学習モチベーションの関係の功罪を問うていないというような意味で使用している。「ゆとり教育」と勉強時間の関係は 1990 年代大きく変化した。例えば、ベネッセの学力調査でも明らかになっている。しかし、受験競争の緩和の議論になっても、受験競争自体の効果そのものを問うことない。競争が児童・生徒のモチベーションを調達することは自明であって、現在も小規模学校を統合し、学校規模を大きくする根拠として使用され続けている。省みないことで、「問題」として現象することがない。

まず、日本社会の歴史的な転換と「別のステージ」の質について整理しておく。

最もマクロな構図は、日本社会は 1960 年からおよそ 30 年間続いた「右肩上がり」の経済成長を終え、15 年ほどの「停滞局面」を経て、2005 年以降「右肩下がり」の「後退局面」に移行したことである[3]。これは、中央教育審議会答申（2021 年 3 月「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）」）が「非連続」な社会変化をもたらす原動力として強調する「Society5.0 時代」という理解とは全く異なる。同じ科学による見通しと言っても、一種の技術決定論にすぎない「Society5.0」を不可避の前提とした未来予想は、他方で刻々とその「成果」が被害甚大な姿で生じている「地球温暖化」（しかも、地球規模でそれに抗し得ない人類の現状）を全く無視することと著しい対称をなしている[4]。

「後退局面」の特徴を 3 点のみ指摘しておきたい。

第 1 に、言うまでもなく「人口減少」である。日本の地域社会にとって「人口減少」は、もはや与件である。日本全体の人口減少は、2009 年（2008 年がピーク）から始まり、加速を続けている。しかしながら、「生産年齢人口」の減少は既に 1995 年から始まっていた。その意味で、現在の状況は、四半世紀前から予見済みであった（対処しなかった）点に注目する必要がある。

第 2 に、災害多発とそれに対応する社会の（特に、政府の）「レジリエンス」が非対称な状況が出現した。「レジリエンス」が発揮できないようになった。典型的には 2011 年の「東日本大震災」と「福島原子力発電所事故」をあげることができる。

前者は自然災害である。しかし、時期は不明であるが、生じること自体は予見でき、怠りない準備をしていた市町村もあった（いわゆる「釜石の奇蹟」）。しかし、ほとんどの自治体ではハードウェア依存（例えば、「田老第一防潮堤」）で被害を拡大させた。それ以上に問題は、「復興」が進まないことである。災害後 10 年経って、「復興計画」を考える上で、「人口減少」が考慮されていなかったことも明らかになっている。そのことは、どのように理解すれば良いのだろうか。それどころか、「東日本大震災」をノスタルジー的な景気（「人心」か、あるいは「政権」）浮揚策（「東京オリンピック」）として消費したことに、問題は端的に表現されていると考えられる。

後者の「福島原子力発電所事故」は、「アンダーコントロール」どころか、「事故」そのも

---

[3] 2021 年（現時点）ではこの理解は極端である誹りがあるかもしれない。しかし、もう少し後世から見れば、2005 年～2020 年に生じたことは、顕著な転換点（点というよりは「画期」。例えば「無策な時代」）として語られることになるだろう。

[4] 「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」の「第 I 部　総論」を参照。「Society5.0 時代」は児童・生徒の学習や教員の資質・能力に関わる課題としてのみ考慮される。他の、例えば経済的な格差の下で、それが実現するか（できないか）という関係において議論されることはない。これは、この「答申」の世界観とも言うべきものである。雑多な「未来」像がパラレルにある。それぞれの関係は検討されない。このパラレルな「未来」像がそれぞれに教育の課題を提示し、それに別々に対応する努力が学校や教員に要請される。
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-2.pdf

のが現在も進行中である。電源喪失を防ぐための防波堤の嵩上げの必要性について、当該電力会社内でも議論されていた。それにも関わらず、収益の観点から見送られたことに端的なように、人災的側面は半ばする。また、希望的観測として「収束の目途」や「廃炉計画」を発表してはいるものの、それが実現可能ではないことは「お約束」だろう。

第３に、1990 年代中盤から進められた政治改革の結果として、「官邸主導」の強力な集権的な国家として日本は衣替えした[5]。しかし、同時に進められた「新自由主義」による国家体制の変更は、日本社会の「レジリエンス」や「エッセンシャル」に関わる平時には無駄と評価されるよう予備力を「肉抜き」加工で削ぎ落とし、効率化＝脆弱化した。

例えば、教育現場において教員の「ブラック労働」が当たり前になっていることにも明らかだ。今次、文部科学省（以下、文科省と略する）が教育現場に取り組ませようとしている様々な改革も、「過労死ライン」で働かざるを得ない教員にとって、「鞭」の意味しかもたないのは言うまでもない。不可欠な現場の工夫を引き出すことは、無理な相談である。

現在の「コロナ禍」において、「新型コロナウイルス」感染拡大を収束するために検査を拡大することは、１年以上前から必須であった。しかし、保健所のマンパワー不足は、未だに全く解消できない。国家の強力な指導力をもってしても、検査さえ満足にできない状況の改善は不可能である。

さらに、「線上降水帯」（せんじょうこうすいたい）という耳慣れない言葉とともに、頻発するようになった「50 年に一度の記録的大雨」や、他の災害があって被害を受けた住宅があっても、保険金の請求や各種支援・救済措置などの手続きの際に提出を求められる「罹災証明書」の発行に非常に時間がかかるのも、地方公務員の不足と非正規化に原因があることも自明である。

すなわち、災害が多発するようになったが、それが人為（問題があっても「否認する」、「データ」をまじめに収集しない、隠蔽したり、改竄したりする）によって拡大し、国家として立ち向かう力を発揮することができなくなった。これらのことをどのように理解するのかについては、様々な見方があるだろう。しかし筆者は、ひとつひとつが別なことで、その原因がわかれば解決ができるというようなことではないのだと考える。国家として「老いて」疲弊し、解決の意欲も持てないから生じた、言わば「未知の未来」に立ち向かう勇気がもてない状況にあるのではないかと感じている。

そして問題なのは、国家の後退を成熟とみることも可能で、人びとの生活の質（消費的に豊かであることが、即幸福ではない）が後退しなければ問題なしと判断して良い。しかし、その速度の緩／急や、レジリエンスの（人びとがそれと抗うことができる）限度を超えたものなのか、全体社会として計画的、あるいは戦略的に後退するのか、「戦線崩壊」するのか

---

[5] 1990 年代からの政治改革については、待鳥聡史[2020]を参照。この書籍で待鳥は興味深い指摘をしている。政治改革は、１点を除き、当初の意図とは異なる形であった場合を含めて、首相官邸への権力集中を招いたという結論である。この除かれた１点が、「地方分権改革」である。

の違いは大きい。

現在進められている教育改革も、多くの問題を抱えている。しかし、それがもたらすことを少しでも観察可能とし、意味のあることを生かし、プラスを強めることができるような研究を行いたいと考えている。特に重視したいのは、若者（児童・生徒）が「未知の未来」を探究する（立ち向かう）勇気をもてること、その過程で力を発揮できるように解放することである。

本報告書の検討課題にさらに接近する。そのためには、本研究がこれまでの教育体制の何を問題だと考えるかという理解を、明らかにしておく必要がある。

それは、これまでの中等教育原理（「競争」）が機能しなくなり、それ代わるものを教育に内在的な形で生み出す必要が生じているという歴史的な理解である。

1960 年代からおよそ 1980 年代までの 30 年間、日本の中等教育を組織化する原理は「進路（受験）指導」であった。学校は全体（体制）として、「進路（受験）指導」を梃子に、進学（一時期は就職も含まれる）へのアスピレーション（aspiration＝熱望）を高め、必要に応じてクールダウン（冷却）していた[6]。「進路（受験）指導」の方法として重要であったのは、日本で独自に「開花」した「偏差値」（利用）である。

「進路（受験）指導」の対象は生徒である。しかし、学歴や学校歴の獲得競争の結果（将来の社会的地位の配分）は、生徒だけではなく保護者にとっても、最重要であった[7]。露骨な言い方をすると、受験競争という「心棒」で日本の中等教育は成り立っていた。生徒の学習のモチベーションの調達は、競争によって行われ、教育に内在的なもの（何かができるようになること、興味関心を満たすこと）ではなかった。

しかし東西の冷戦体制が終了し、アメリカ合衆国の世界戦略にとっての日本の位置の変更と経済のグローバル化の進行は、それまで日本において合理的であった企業を中心とした社会構成、すなわち働く場所と学ぶ場所の双方で、（男）親と子が競争する「競争社会」の環境を激変させた。1990 年代以降、「受験競争」もそれが通用する範囲を縮小して行った。

学校においては、「学びからの闘争」と呼ばれる時代、子どもたちにあっては「いじめ」や「不登校」が日常化した時代[8]へと転換していった。しかしながら、それから四半世紀過ぎても、さらに日本社会全体の人口減少や、それが地方で顕在化した「地方消滅」の時代にあっても、「進路（受験）指導」に代替する中等教育の原理は見当たらない。しかし、国の

---

[6] この用語からも判るように、第２次世界大戦後にアメリカから単線型教育制度と同時に移植された「進路指導」（guidance & counseling。当初は、vocational guidance であった）がモデルである。

[7] 日本において受験競争に平等を求める力が強いのは、戦後社会において平等を求める運動（労働運動、「ジェンダー平等」を求める運動等）が収束する中で、それが「機会の平等」にすぎず、経済格差の拡大により形骸化しているとしても残された唯一の領域だからである。そして、これは保護者や教員による「高校全入運動」の成果により、かち取ったもの（政府としては妥協したもの）であるからだ。

[8] 教育政策的には「ゆとり教育」の時代であるが、同時に「ゆとり教育」の間隙を教育産業が保護者の経済力の差に応じた形で補てんした時代でもある。

教育政策は何も取り組まなかった訳ではない。

文部省・文科省は「キャリア教育」（以下、カッコは省略）を模索した。詳しい説明は拙稿に譲るが、競争による学習モチベーションの調達の不可能性についての理解を基にしている試みと考えることができる[9]。

（2）本研究におけるキャリア教育の理解

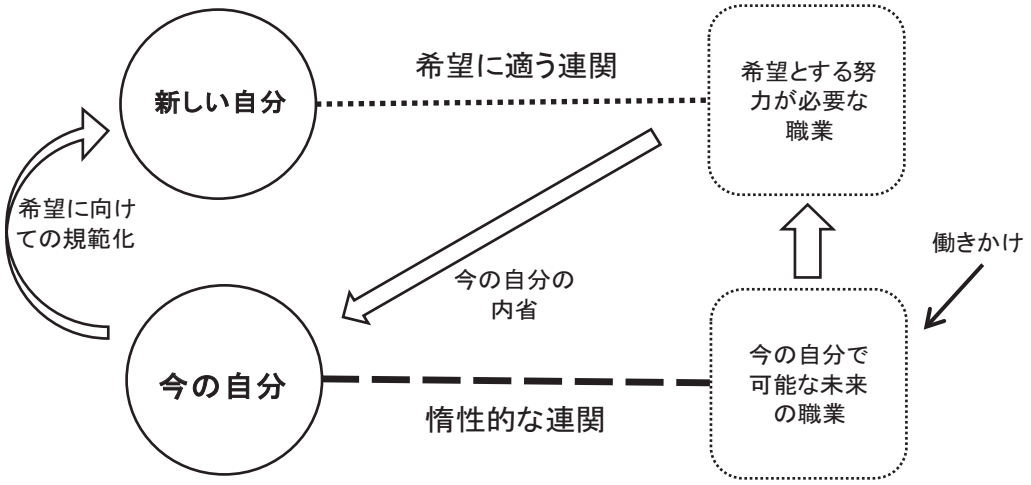
キャリア教育は、導入当初の関西地域のローカルな営み（「トライやる・ウィーク」）から、小泉改革の影響（「フリーター・ニート対策」）を受けるなかで一種の就労道徳の教育（「職業観」・「勤労観」の教育）に変質した。その後、長い時間をかけて、就労に限定されない、中等教育においてはむしろ進学向けの進路指導の方法論、広い意味での学習モチベーション調達の手段として学校教育に浸透したものと考えることができる。

しかしながら、同時に 2000 年代中盤以降は、「中流階層」の家族を基盤にして子弟を進学に向かわせていた力も、階層分解の進行によって削がれ始めた。また、受験競争の弛緩を一定程度底上げした教育産業も、都市部に集中していたことから、地域格差の影響を拡大させる役割を果たした。

とりわけ教育産業の乏しい地方では、学校による生徒の学習モチベーションの鼓舞が重要かつ必須となった。そのリソースとしてキャリア教育が求められ、同時に困難に直面している。大樹町におけるキャリア教育実践も、この困難との格闘の産物であると考えられる。

ところで、キャリア教育の教育原理の骨格は、学習モチベーション（受験競争に耐え抜くモチベーション）を生徒の職業的「夢」から調達する試みとして考えることができる。この報告書での検討課題とも重なるので、図表０によって説明する。

図表０　キャリア教育の原理



9 浅川和幸［2010］参照。

以下の①～④を順番で生徒に考えさせる。

①生徒にとって「今の自分で可能な未来の職業」(「惰性的な連関」、中央下の太い点線)を、教育的働きかけ（右側斜めの「→」）により、「希望とする努力が必要な職業」に変える（右側上向きの「⇒」)。「未来の職業」に限定された働きかけである。

②「希望とする努力が必要な職業」の地平から、「今の自分」の行動・生活を内省させる（中央の左下に向かう「⇒」)。

③「希望とする努力が必要な職業」に相応しい自分になれるように規範化し（左側の上向きカーブの「⇒」。「希望に向けての規範化」)、「新しい自分」を作り出す(「希望に適う連関」、中央上の細い点線)。

④この実践の焦点は、学習のモチベーションを、「生徒自身の未来（職業）構想から調達すること」にある。

前述したように、キャリア教育は、「希望とする（努力が必要な）職業」を想起することで、今の自分を内省し、希望に向けて規範化（焦点は学習モチベーションの調達）する試みと理解できる。子どもにとって、同質のイメージ可能な日常経験を探すなら、「目標を決めて貯金を行うこと」になるだろう。そして直ぐに、現代的な困難を抱えることに気がつく。

第１に、今日の生徒（子ども）にとって「目標を決めて貯金を行うこと」は迂遠である（「現在志向」)。「ローン」的発想は日常化している。

第２に、今の自分を希望に向けて規範化すること（「学習＝労苦」をすること）は、不確かな「希望とする職業」と交換対象にはならない。

第３に、今日の生徒（子ども）は「宿命論的な人生観」[10]を生きている。土井［2019］によると、努力の価値は減価し、階層差の影響もあるため、よりキャリア教育が必要だと思われる学習モチベーションの乏しい生徒にこそ、この考え方は受け入れられない公算が高い。

そもそもキャリア教育が想定しているのは、「個人的な（希望に適う）将来の職業を想起するなら、現在の学習意欲が生まれるはず」という素朴な推測である。生徒にとって、（苦労したとしても）「未来が悲観的であるならば、せめて今を楽しく生きよう」と考えることは可能である（簡単である)。

先ほどの「貯金」の例の応用で行けば、「目標を決めなければ」、「現在、貯金（倹約）する必要はない」となる。このことを、生徒は既に知っている。しかしながら、この発想は生徒オリジナルの「悪知恵」では全くない。現在の日本国の発想そのものである。国債発行にまかせた「東京オリンピック」等の「不要不急」の行事や、「復興」につながらない大土木工事、気の遠くなるような環境汚染のリスクと引き換えの現在の過剰な電力使用等、大人が率先してやっていることである。

さらに、職業的「夢」というリソースに付帯する困難の原因を、２つだけ簡単に指摘しておきたい。

---

[10] 土井隆義［2019］参照。

ひとつは、将来の職業的な「夢」が日本社会においては見いだしにくいことである。現実的に見ても、会社に所属して指示に従いフレキシブルに働く日本の労働者は、特定の職業世界の住人ではない。会社員になるために、どのような準備をすれば良いのかが不明である。勢い、生徒に人気のカタカナ職業（例えば、「ユーチューバー」）や分かりやすい職業（「スポーツ選手」、「医者」等）が選択されるしかない[11]。

もうひとつは、個人的な「夢」の追求とそれに対する「自己責任を問う」という枠組みでは、生徒は力を発揮できない。結局の所、自己責任だけを問われるのなら、努力しなければならない夢など持たなくても良いのである。生徒に対する周囲の期待、「それに応えたい」という生徒の気持ち、生徒自身の学びは「自分だけのものではない」という理解が不可欠なのである。すなわち、「自分の夢」は「社会的な夢」や周囲の期待と重なって、初めて打算を越えた規範的な力をもつ可能性が生まれる[12]。

すなわち、キャリア教育を前提とする「夢」を、職業に限定することと個人的なものに限定することの、２つの「縛り」から解放することが必要である。

ところで前述したように、機能しなくなった「競争」原理に代わるものは、教育内在的な形で考えられなければならない。そして、教育内在的な原理として有力なものは「探究」であるとの仮説を、筆者はもっている。

まだ不十分であるが、この仮説の一部を「総合的な探究の時間」を深める形で、拙稿（浅川［2020］）で考察してみた。その全体構造の解明は今後の課題である。しかし、キャリア教育に修正（拡張）を加える必要があることを示唆できると考えている。

筆者は、前述したように、「自己責任」が道徳として説かれる現時において、キャリア教育が生徒個人の職業的「夢」だけを学習モチベーションのリソースとするならば、あまり力を発揮しないであろうと考えていた。そして、２つの「縛り」から解放することを提案した。しかしそれだけでは足りないとも考えている。

この間行ってきた別の調査研究の結果から、生徒が（未来の）「夢」を選択する際には、必要な「努力」との「交換」としてイメージし、その是非を特定の観点から判断しているという仮説を筆者はもっている。そして、具体的には、「コスパ」の計算から、「努力」の意味／無意味を判断するというものである。「割に合う」かが重要で、「かなわない努力」など無意味は当然のこととして、「割に合わない努力をする」のも無駄であると考える。その責任は、「どうせ我が身でとりさえすれば良い」という理解である。まさしく、「自己責任」が喧伝される時代の申し子と考えられる。

キャリア教育が前提とする「個人」の「職業」の「夢」は、「個人」という点でも、「職業」という点でも修正される必要があるが、さらに前提になっている「夢」や「努力」の（時間

---

11 児美川孝一郎が『キャリア教育のウソ』［2013］で力説していたのはこの辺りのことである。

12 労働問題の泰斗である熊沢誠が若者の職業における「自分探し」が挫折する必然性について議論していたのと全く同じ構図である。熊沢［2006］118～133 頁参照。

も含めた）領域・境界が、再考されるような反省（道徳的なニュアンスをもっていない）が可能な、あるいは促される実践でなければならない。例えば、生徒の言う「夢」は個人的なものに尽きるのかどうか、例えば「地域の未来」と関わっていたりすることを探究することが重要である。すなわち、「個別化」「孤立しない」夢であることが体得、実感できなければならない。そのためには、個人と社会との重なりに鋭敏になることができるような（他者との対話）環境が重要である。すなわち、生徒個人の視点が乗り越えられ、社会的な視野が職業という狭い範囲から、人生全体へ拡がる必要がある。

すなわち、「夢」と「努力」、そしてその「コスパ」を考えるという比喩そのものと、それぞれの言葉の意味を問い直すことができることが重要である。「夢」とは何か、現実との関係はどうか、叶わなければ意味がないのか、自分の「夢」と他者の「夢」はどのような関係にあるのか等の理解が深められなければならない。これは「努力」や、「コスパ」についても同様である。生徒が消費文化の比喩で理解する「夢」や「努力」、そして「コスパ」を温存したままで、「夢」を作り替えても、より「コスパ」の良い職業を考えるだけではないのだろうか。そして、拙稿でも検討したが、受験競争のモチベーションリソースとしてのキャリア教育は、高等教育の段階では無意味となる。受験の手段としての「夢」は、受験が終われば用済みで、生徒＝学生はまたゼロから人生を考え始めなければならない[13]。

このような意味で、キャリア教育は、生徒が人生という「未知の未来」を探索することが可能な形に変更することを考える必要があるだろう。すなわち、キャリア教育を「哲学的探究」に拡張するという提案になる[14]。

このようにキャリア教育を人生の探究学習として再定義するなら、生徒が住む地域という場所性がキャリア（未来の「夢」、職業）実現のための障害として理解されてしまうことを和らげることができる可能性が生まれる[15]。

（３）これまでの研究の経緯

ところで、筆者は中等教育の新たな原理の模索を、地方の地域社会内在的に考えたいと思っていた。そのために 2013 年度から、（北海道の）地方の中学生を対象とした地域アイデ

---

[13] 浅川［2019］参照。

[14] 哲学的探究については入門書も含めた良書が増えてきた。例えば、森田伸子［2011］を嚆矢に、河野哲也編［2020］、M.R.グレゴリー他［2020］等をあげることができる。また、新しい学習指導要領においてカリキュラムの軸として、「総合的な探究の時間」が考えられているように、その重要性は一般的に知られるようになってきた。

[15] 一般的に地方でキャリア教育を行う場合、そこに住み続けることは否定的な意味を受け取りがちである。「小さな世界に住み続けて」、「人生の可能性を閉ざすのか」という問いかけが、キャリア教育を通して、一種の隠れたカリキュラムとして生徒に伝わることになる。そのような意味で、学習モチベーション調達の手段であるキャリア教育が同時に、「村を捨てる学力」形成となる矛盾があった。「夢」とは何か、「実現する」とはどのようなことか、「人生の豊かさ」はどんなことか、それを個人的な結論から、集団的な問に変更することで、これまでの、地方という場所性をキャリア（未来の「夢」、職業）実現のためのハンデとして理解することを相対化する。

ンティティと教育に関わる研究を始めた。

当初は、「地方創生」問題と学校教育の双方向的な活性化の問題を、地域の「若き担い手」（若手労働者と生徒）の生活と意識に注目して考えたいという漠然とした構想があっただけである。オホーツク総合振興局管内の特定の村（N 村）を対象として研究を開始した。

まず、「若き担い手」として地場産業（介護も含む）の労働者と中学生のインタビュー調査を行った。生徒が中学生であった理由は、この村には高校がなかったからである。そして、中学生へのインタビュー調査を始めてすぐ、中学生を村の若き「担い手」と考える上で、大きな困難があることが解った。その時は、この村に固有なのか、それとも地方の中学生に共通するものであるか判らなかったのだが、地域格差に基づいた負の地域アイデンティティが、中学生の進路志向を大きく制約していたという事実があった。この負の地域アイデンティティは、村という地域の評価を、特性の一部、具体的には消費市場へのアクセスの不便さを絶対的化したものであった。例えば、「コンビニが 1 件しかない」というような理由が、村を離れて進学する理由として語られていた。

そこで、「若き担い手」研究の生徒部分のテーマと研究方法を修正した。テーマは、地方の中学生の地域アイデンティティを軸にして、地域横断的な比較検討するという修正である。幾つかの中学校について比較研究を行った。高校についても補足的な調査を行ったが、まだ残念ながらまとめきれていない。また、働き手である「若き担い手」研究も断続的に続けている。

ところで、大樹町立大樹中学校について、生徒のアンケート調査をさせていただいたが、この地域アイデンティティの構造研究の延長線上の位置づけである。

ところで、中学生の地域アイデンティティの比較研究は、2013 年度から始められたが、N 村においてはこの年度と 2015 年度の 2 回（共に中学３年生）、2016 年度の 0 町、2018 年度の S 町と進められた。

結論的に述べるなら、当初 N 村の中学生に顕著であった負の地域アイデンティティは他町でも確認できた。消費文化という視角からの地域格差理解、その下での自町村の劣位の自覚である。しかし、負の地域アイデンティティを何が軽減、あるいは相殺するのかについては地域差があった。生徒が居住する地方にアイデンティティを育成するためには、「地域学習」において「地域が優れていることを伝える」だけでは不足である。生徒には、「地域の担い手」としての影響力（インフルエンス）を発揮する参加経験が決定的に重要であった。

これらの調査結果はそれぞれ報告書として発行され、全体をとりまとめたものを日本教育学会で報告した。

ところで、大樹中学校ではここまで研究した中学校と異なり、「ふるさと学習」（「地域学習」と同じものとして考える）とキャリア教育という２系統の教育実践の両方が、熱心に行われている点で特徴的である。そして、「ふるさと学習」は町で小・中・高一貫して実施され、最終的には「高校生議会実践」として総括される。進路指導の手段としてのキャリア教育を越える質をもっている可能性があると考えた。

筆者がここまで行ってきた地域アイデンティティ構造の理解との異同（第１の研究課題）と、「ふるさと学習」・キャリア教育との関係（第２の研究課題）が、検討対象となる。

（４）本研究の方法とその特徴

この報告書は、大樹中学校３年生のアンケート調査を素材として、分析したものである。しかし、一般的なアンケート調査の報告とは方法が異なっている。

筆者は、生徒の考えを「そのままの言葉」を検討することで考察することを追求している。こちらで予め考えた答から、近いものに○（マル）を付けたものを集計することで、「知った」とは考えない。そのため、回答の多くを自由記述形式でお願いした。しかし、自由記述をそのまま掲げるだけでは、分析にはならない。そのため、自由記述の多様な内容を、比較し、質的に区別し、同質のものを集約する方法論（集約化）を採用した。分析方法は、「質的コード化の技法」というものである[16]。

集約化作業の手順は、概略以下のようなものである。

まず、自由記述のそれぞれに共通して登場する「キーワード的なもの」（以下では、キーワードと省略する）に注目する。生徒のひとつの自由記述は、ひとつ以上のキーワードからできている。これを区別する。自由記述を、キーワードに注目して分解すると言い換えても良い。これを全ての自由記述について行う。そうすると、人が違ってもキーワードには共通するものが多々あることが分かる。この共通性に注目してまとめる。この共通のキーワードを「要素」として考える。「要素」はあまり集約度が高くないし、ある程度数が多くなる。

次に、この「要素」を比較し、質的な共通性が認められると判断できた場合は、それをさらにまとめて「ラベル」を作成する。

最後に、この「ラベル」を比較し、質的な共通性が認められると判断できた場合は、それらをまとめて「カテゴリ」を作成する（以下では、「要素」「ラベル」「カテゴリ」のカッコを省略する）。すなわち、要素、ラベル、カテゴリは記述の質的な共通性に注目して、より集約度を高めた（それが可能であると判断できた）系列となっている。

しかしながら、要素－ラベル－カテゴリと３段階に集約可能であった系列もあるが、要素を作成する段階で他と共通する性格がない場合や、ラベルを作成する段階で共通するラベルがない場合もある。これらの場合、前者は要素がラベルやカテゴリと同じ言葉となり、後者はラベルとカテゴリを同じ言葉になった。すなわち、３段階に集約可能であった系列、２段階に集約可能であった系列、１段階で要素名のままの系列が混在することになっている。

---

16 質的コード化の技法は、M－GTA 分析（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）に近いものである。「理論的飽和」に至るほどのケース数がない場合に使用される。コード化の適切性という点で万全のものとは言えない。この報告書の場合も、全体で 41 人の分析に止まり、共通性が非常に高い自由記述もあれば、1 人にしか登場しないものもある。このような意味で、生成したラベルも暫定的な性格を免れることはできない。ご批判を享受する次第である。解釈との整合性を確認するために、原文も掲げた部分もある。質的コード化の技法については、髙橋亜希子［2007］を M－GTA 分析については、木下康仁［1999 年］を参照した。

質の違いを大つかみに表現する必要から、分析結果として説明する場合は、集約化作業とは逆向きに行われる。最も大きく区別がカテゴリとなる。カテゴリが一段細分化されたものがラベルとなる。ラベルがさらに一段細分化されたものが要素となる。そのため、３段階（カテゴリーラベル－要素の系列）と２段階（カテゴリ－要素の系列）と１段階（カテゴリ＝要素の系列）で説明される形になっている。

冗長な説明となってしまったが、実際の分析を見ていただければ直感的につかめると考える。また、最初に自由記述の整理・分析を行う箇所で、内容に即して補足説明を加えることにしたい。

要点としては、自由記述に重点を置いたアンケート調査を行い、だからこそ質的な分析に意を用いたということである。このような言葉で中学生がイメージする言葉に近いものを把握したいと考える。その方法は、記述内容の質的な区別を重視し、区別された要素の共通性に注目して集約することで、量的にも把握することを目指すことである。

（５）　報告書の構成

本報告書は、２つのブロック（「第１章　調査結果の概要」、「第２章　調査結果の考察」）から構成されている。

「第１章　調査結果の概要」では、アンケート結果を質問項目ごとに分析し、それについて解説を加えた。第１節から第１０節までの１０節で構成されている。

「第２章　調査結果の考察」は、この研究のテーマ（地域アイデンティティ構造の理解との筆者の研究との異同、そして大樹中学校で熱心に取り組まれていた「ふるさと学習」・キャリア教育との関係）の考察を行った。第１節から第４節までの４節で構成されている。

「第３章　まとめにかえて」では、第１章と第２章を踏まえて、中等教育の原理概念（進路指導）とその方法論としてのキャリア教育を、今後どのように替えていけば良いのかについて試論を述べた。

第１章　調査結果の概要

序章で述べたように、この教教育実践が生徒の地域アイデンティティにどのような影響を及ぼしているのかを解明することが、本報告書の最終的な検討課題である。

しかし、本報告書では、学習実践が地域アイデンティティに直接影響を与えているという理解はしない。生徒の「学び」の社会的環境それ自身がどうなっているのかを把握する。その土台の上で、総合的に考察するものである。

そのために、まず調査結果の概要を明らかにする。調査票における項目の順番で、補足を交えながら考察していく。大樹町では、「大樹学」（「ふるさと学習」）とキャリア教育の旺盛で意図的な教育実践が行われていた。この教育実践についても詳細な説明を行う。

第１節　地域と学校について

大樹中学校は、十勝総合振興局管内（以降では、十勝圏とする）の南西部に位置する大樹町に設置された公立中学校である。大樹中学校の存する大樹町は、2020 年 3 月末現在で人口が 5,462 人の小規模な町である（北海道で考えた場合は、小規模とは言えない)。町には小学校は 1 校、中学校が 1 校、高校が 1 校ある。

大樹中学校は、へき地第 1 級に指定されたへき地校である。

学級数は、通常学級 4 学級と特別支援学級 3 学級である。また教員数は、校長、教頭、教員 14 人、養護教諭 1 人の 17 人である。

調査の行われた 2019 年度において通常学級は、第 1 学年のみが 2 学級で、第 2・3 学年は 1 学級である。生徒数は、2019 年 4 月 1 日現在で、第 1 学年が特別支援学級も含めて男女合わせて 45 人、第 2 学年が同様に 38 人、第 3 学年が 41 人の、学校全体で 124 人であった。

調査の対象は、第 3 学年の 1 クラス 41 人である（第 3 学年は 1 クラスのみである)。

アンケート調査は 2019 年 9 月に行われた。

中学校に依頼し、キャリア教育担当教員によって実施された。使用した調査票は、報告書末尾に添付した。質問項目には自由記述がたくさんあったため、項目によっては、未回答が多くなったところもある。

以下では、調査票のデータをもとに、中学生の学校生活について、調査項目に沿った形で、概要を把握してみたい。

（１）生徒の人数と性別

前述したように、第 3 学年（1 クラス）の 41 人がアンケート調査に回答してくださった。生徒数と性別を確認する（図表 1)。

図表１　調査対象生徒の構成

性別	度数(人)	内訳(%)
男子	16	39
女子	25	61
計	41	100

男子生徒が 16 人、女子生徒が 25 人であった。女子生徒が多いという特徴がある。

（２）保護者の職業（主なもの）の特徴

生徒の家族的な文化背景を考えるために、保護者の職業（共稼ぎで両方の記述がある場合は、主要と判断できるものを選択させていただいた）について自由記述方式で聞いた。それをまとめたのが図表２である。

一般的に中学生にとって、保護者の仕事の産業別分類も職業別分類も統計分類上のもので、身近なものではない。また研究者でも、分類の詳細に微妙なところも多い。そのため、ざっくりとなるのは当然であるが、おおよその分布はわかる。

重要な特徴として確認しておくべきは、「公務員」が多いことである（11 人で 26.8%）。そして、民間企業に雇用されているという意味の「会社員」（7 人、17.1%）と農林漁業が拮抗している。この農林漁業の多さには注目する必要がある。そして、これ以外の具体的職業をあげてくださった方は、全て民間企業に雇用されているという意味であろうから、「会社員」というカテゴリはこれからさらに膨らむことが考えられる。

図表２　生徒の保護者の就業上の所属・職業

所属・職業	度数(人)	内訳(%)
公務員	11	26.8
団体職員	1	2.4
会社員	7	17.1
生産工程従事者	3	7.3
運搬・清掃・包装等	1	2.4
サービス職	2	4.9
販売職	1	2.4
専門職	1	2.4
農林漁業職	7	17.1
自営業	2	4.9
N.A.	5	12.2
計	41	100.0

※　両親共に記述のある場合は、主たるものと思えるものについて集計した。

※　生徒の自由記述を集計したため、正確な職業分類ではない。一部に所属や産業も混在している。

（３）どのような学校生活を送っているか

生徒はどのような学校生活を送っているのだろうか。学校生活の中心（軸）を聞いたものが図表３である。調査時期が９月であったため、部活は引退期にあった。そのため、「部活」を選択した生徒は少ない（4 人、9.8%）。そして、受験に集中しつつある頃でもあるだろうから、「勉強」が多くなった（17 人、41.5%）。しかしながら、「友人関係」を学校生活の中心（軸）としている生徒はそれを上回る（19 人、46.3%）。

図表３　学校生活で中心においていること

	度数(人)	内訳%
勉強	17	41.5
友人関係	19	46.3
部活	4	9.8
N.A.	1	2.4
合計	41	100.0

※ ひとつのみを選択してもらった。

男子・女子で差があるのかを確認したが、「勉強」に女子が多く、「友人関係」に男子が多いぐらいであって、それほど大きな差はなかった。

ところで、学校生活の中心（軸）はどのような理由で選択されたものだろうか。それを中心（軸）別に整理した。図表４は、「勉強」を選択した生徒からその理由を聞いたものをまとめたものである。

図表４－１　学校の生活で中心においていることで「勉強」を選択した生徒の選択理由

選択理由(集約したもの)	度数(件)	内訳%
高校受験目的	7	41.2
学校は勉強する場所でだから	4	23.5
将来・大学進学	2	11.8
小計	13	76.5
N.A.	4	23.5
計(n=17人)	17	100.0

ところで、図表４－１は自由記述を、意味的に同質だと判断できる回答をまとめた（集約した）ものである。集約の仕方がわかるように、具体的な記述をそのまま載せた図表４－２（次頁）も掲載しておく。

「高校受験目的」という理由づけは、前述したような「受験」に集中しようとしていること（「今一番」、「大切な時期」）がうかがえるものになっている。キーワードは「受験生」で、それが今の自分を定義付けている。

しかし、学校のそもそもの目的として、「勉強する場所」であるというしっかりとした定義づけをもった生徒がいることもわかる（4 人、23.5%）。

ところで、高校受験以降まで時間的視野が展開している生徒は少ない（2 人、11.8%）。

図表４－２　選択理由の具体的な記述

選択理由	具体的な記述
高校受験目的(n=7人)	受験生として今一番頑張りたいことだから。
	受験生だから。
	今年は、受験生で勉強が大切な時期だから。
	高校受験をしようと思っているから。
	受験生だから
	受験生だから。
	行きたい高校にうかりたいから。
学校は勉強する場所だから(n=4人)	学校は勉強をしに来ているから、
	学校は勉強する場所だと私は思ったから。
	友人関係も少しあるけれど勉強をしに来ているから。
	まなびにいってるから。
将来・大学進学(n=2人)	公立の大学に行きたいから。
	自分の将来に重要だから。

同様に、「友人関係」を中心（軸）と考えている生徒は、なぜそれを選択したのだろうか。図表４－１、図表４－２と同様の表示の仕方で検討する。それが、図表５－１と図表５－２である。

図表５－１　学校の生活で中心においていることで「友人」を選択した生徒の選択理由（複数回答）

選択理由（集約したもの）	度数(件)	内訳%
友達は重要・大切	6	31.6
特に長期で重要	3	15.8
学校生活の目的・必要性	6	31.6
楽しい	2	10.5
N.A.	3	15.8
計(n=19人)	20	105.3

「友達」という存在そのものの価値の高さ、手段には換えられないれないこと（端的には、「お金には換えられない」）がうかがえる内容からなっている（6 件、31.6%）。これに、「特に長期で重要」の 3 件（15.8%）を加えても良いかもしれない。合わせるなら、5 割に及ぶものとなっている。

対照的に、学校という場と結び付いた意味づけや、学校生活を充実して過ごすためには不可欠という意味づけの生徒も見られる。「楽しい」に分類した 2 件も「学校生活の目的・必要性」に近いかもしれない。

ところで、表記上「おやっ」と思われる点について、今後も同様な記述があるので、説明しておきたい。自由記述は内容的に複数からなる場合も多い。そのため、内容数と答えた人数が食い違う。前者の方が多い。例えば、ひとりで複数答えた場合である。図表５－１の場合がそうで、ひとりが２つの内容（2 件）を答えたものがある。その内容に則して、記述も分解し、それぞれを振り分けている。

ともあれ、生徒にとって友達の占める位置は非常に大きい。

図表５－２　選択理由の具体的な記述

選択理由	具体的な記述
友達は重要・大切(n=6人)	友達を大切にしたいから
	友達が自分にとって大きな支えとなっているから。
	お金に換えられない
	あまり友人がいない方だから学校生活で友人関係に中心を置いています
	生きていくのに必要
	人との関わりを大切にしたいから
特に長期で重要(n=3人)	今後、大人になっても必ず関わるものだから。
	友達は今後必要だ
	ずっと友だちでいたい
学校生活の目的・必要性（n=6人）	勉強は塾や家でもできるけど友人関係は学校生活を通してできていくと思うから。
	勉強は家でもできるから。
	勉強は大切だけど友達がいないと学校に行きたいと思わないから。
	勉強は学校でなくてもできるし、部活は今、やってないから。
	部活は終わってしまっていて、あまり勉強は好きではないから。
	勉強は家でもじゅくでも出来ると思うし、いやでも毎日顔を合わせる仲間だから。
楽しい(n=2人)	友達が居ないとつまらないから。
	友人と楽しくすごし、卒業したいと思ったから

さらに、「部活」を学校生活の中心（軸）として選択した生徒の場合の選択理由が図表６－１と図表６－２である。

図表６－１　学校の生活で中心においていることで「部活」を選択した生徒の選択理由（複数回答）

選択理由（集約したもの）	度数(件)	内訳%
好き・楽しい	2	50.0
頑張ることができたきっかけ	1	25.0
N.A.	1	25.0
計(n=4人)	4	100.0

図表６－２　選択理由の具体的な記述

選択理由	具体的な記述
好き・楽しい	いちばん好きな時間だから　※今はもう引退しましたが。
	楽しいから。
頑張ることができたきっかけ	何かを本気でがんばろうと思えたきっかけが部活だから。

活動それ自身が目的であり、「頑張ることができたきっかけ」であるという重要な理由

もある。

第２節　「大樹学」（ふるさと学習）の評価

（１）「大樹学」の概略

本報告書で検討する主要なテーマのひとつはキャリア教育である。しかしながら、大樹町の中学校では複雑な構成となっている。

大樹中学校では「キャリア教育「大樹学」」と「キャリア教育」と２つの名称で実施している（以下では、「大樹学」にはカッコをつけ、「キャリア教育」からはカッコをとる)。「ふるさと学習」もキャリア教育としても意味づけられている。その結果、キャリア教育が二重化していた。しかしながら、本報告書ではこれをキャリア教育に一括せず、前者を「大樹学」として、後者をキャリア教育として分けて考えたいと思う。

大樹町の「大樹学」の特徴について説明をするためには、一般的な「ふるさと学習」（「ふるさと教育」もこの名称とする)、いわゆる「地域学」について、さらに「大樹学」がどのような経緯で誕生したのかについても最小限の説明を補足する必要があるだろう。

大樹町では、もともと小・中・高の各学校段階でベクトルが異なる「ふるさと学習」が行われていた。北海道教育委員会は、2015 年から 3 年間、「小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業」に取り組んだ。大樹町はこの事業に認定された。それでばらばらに取り組まれていた「ふるさと学習」を、「12 年間を見通した、体系」的なものに意味づけ直し、名称を付した。それが「大樹学」である。十勝圏では「大樹学」が唯一認定された事業である [17]。

なお、この地域名称に「学」を付けるのは、「地域学」の一般的な名称の付け方であると言える。様々な地域で、取り組みの名称として使用されている。高校段階では、それぞれの学校で設置できる「学校設定科目」の名称として「〇〇学」（〇〇は地域名）が用いられている例が多い。例えば、浜中町の霧多布高校では「浜中学」が行われている。

「地域学」の内容は、地域でかなり大きな差があると思われる。しかし、中心となっているのは、生徒自身に、地域の良さを再発見してもらう取り組みである。「浜中学」の場合は、町内にある「ラムサール条約湿地」に登録されている「霧多布湿原」を中心とした自然保護活動を中心において、生徒が地域の魅力を再発見し、それを町外に発信する探究

[17] 2015 年 8 月 4 日に、北海道教育長名で「小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業実施要綱」が決定されている。実施要項によると、事業の趣旨は「地域の未来を担う人材を育成するため、地方自治体や地域の産業界など関係機関・団体の支援を受けながら、研究指定校において、家庭生活の大切さや子どもを育てることの意義についての学習や、小学校、中学校、高等学校間の体系的なキャリア教育に取り組み、もって本道におけるキャリア教育の充実を図る。」となっている。北海道の各総合振興局管内から、同一市町村内の道立高等学校等、小学校及び中学校の各 1 校がセットで研究指定校に指定される。必要な予算も措置される 3 年間の研究事業である。http://www.furusato.hokkaido-c.ed.jp/（2021 年 3 月 18 日閲覧）

学習に取り組んでいる。この探究学習は、生徒の学習モチベーションを高めるだけでなく、プレゼンテーション技法の修得や、町議会に要望提出するところまでを含む総合的なものとなっている。

ところで「大樹学」の目的を、「小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業」資料から引用する形で説明する[18]。

「”ふるさと大樹”に学ぶ活動を通して、”ふるさと大樹”へ誇りをもって　社会に貢献できる人を育てる」

キーワードでまとめるなら、「ふるさと」というアイデンティティを核に、「誇りをもち」、「社会貢献」する「人を育てる」となる。

「大樹学」全体の構成としては、小・中・高のそれぞれの学校で具体化したものを、接続する形で体系化を図ったという経緯がある。そのために、各学校段階固有の重要な教育目的が個別に強調されることになっている。

中学校の場合は、それがキャリア教育である。中等教育前期の固有の教育課題（進路指導、具体的には高校進学）のために、「大樹学」にもキャリア教育的性格が要求された。そのため、「ふるさと学習」とキャリア教育の２つが重なりながら、併存している形になったと考えられる。

北海道の地方という固有の環境が、中等教育段階の前期（中学校）における進路指導（高校進学）の意味の重さを高めている。生徒の居住する地域は、進路の分岐点が、どこに、どのようにあるのかという点で大きな影響を与える。進路指導において、学校の所在する地域は、クリティカルな問題である。もう少し補足する。

東京都のような特殊な場合は、中学校進学段階が重要な進路の分岐点だろう（幼稚園の方が重要かもしれないが）。例えば、札幌市のようにひとつの学区に高校・コースがたくさんある場合、高校進学段階において、具体的な進学先の違いが、その後の進路を強く固定するわけではない。偏差値序列の同じ高校（コース）が複数存在する場合も多い。

しかし、地方の場合は高校数が限られる。高校進学段階の進学先が、その後の進路トラックに決定的な意味をもつ。極端で、北海道の地方で高校進学を保護者が考える場合に往々にして著面する問題は、学区内の高校に進学することが、大学進学を即難しくする場合である[19]。すなわち、高校卒業後の進学（ここには大きな幅がある）・就職の分岐の前

---

[18]https://www.town.taiki.hokkaido.jp/soshiki/soumu/soumu/sougou_kyouiku_kaigi.data/4281130_shiryou.pdf（2021 年 3 月 18 日閲覧）

[19] 例えば、前出の N 村の場合は村内に高校がない。生徒の学力が非常に高い場合、学区内の高校に進学することは、現実的に生徒の進路を狭めることになる。仮に、生徒を一人で下宿させ、学生生活をさせるとしても、そのための資力は馬鹿にできない。また安心もできない。そのため、進学を機に、離村するという家族を巻き込んだ選択が迫られたり、進学の選択肢として寮のある高専を考えたりしなければならないこともなる。

段階で既に、それを折り込んだ形で高校進学先が構想するしかない。

このような意味で、地方の学校における進路指導（その主要な手段であるキャリア教育）の主戦場は、高校にはなく、中学校にあると言える。

話を「大樹学」に戻す。内容は２つに大別される。

ひとつは、「総合的な学習の時間」を用いた「職業体験」である。これは、町内の事業所における２日間の職業体験から構成される。そして、もうひとつは学校行事として、町内を流れる清流「歴舟川」に関わる（幾つかの）地域行事への参画することある。

生徒は中学校までに、「大樹学」として豊富な地域行事への参加経験をもっている。例えば、「漁業体験」、「稚魚放流体験」、「農園活動」、地区の「酪農祭」への参加等々である。そして、現在では行われていないが、小学生が町議会において要望等を（一日）議員として発言する機会（「子ども議会」という取り組み）を経験していた時期があった。

すなわち「大樹学」は、小学校において「ふるさと学習」として旺盛に実施される。そして中学校において、キャリア教育に寄せた形で実施される。

以下、「大樹学」への感想を分析する。

（２）「大樹学」という参照点（「参考になったこと」）

質問は、「参考になった点」「印象に残った点」を自由記述で聞いたものである。回答は、該当する行事を答えたものが多かった（「職業体験が良かった」等）。どこがそうであったのかという理由のない記述もあった。そのため、「何が」参考になったか、あるいは印象に残ったのかに注目し分類した。図表７である。以下の図表では「参考になったこと」という表記とする。

図表７　「大樹学」で「参考になったこと」

	度数(人)	内訳%
「職業体験」	29	70.7
「ふるさと学習」	9	22.0
その他	2	4.9
N.A.	1	2.4
計	41	100.0

※　自由記述で掲げた単語に注目して数えた。単語を掲げることがなく、内容的には重複している可能性がある（「将来に関わること」）と「何も思わなかった」を「その他」とした。

「参考になったこと」は、「職業体験」に関するものが多い（29 人、70.7%）。「ふるさと学習」に関することを答えた生徒は９人（22.0%）に止まる。

まず、「職業体験」と答えた生徒の感想内容を検討する（図表８）。

図表８　「大樹学」で「参考になったこと」で「職業体験」を記述した生徒の具体的な内容とそのコード化

「記述あり」生徒の具体的な記述	分類コード1	分類コード2
普段とは違う環境で色々なことを感じ、学ぶことができた。	貴重な機会だ	ー
他の所ではうけられないことなのでとてもありがたいです。		ー
いつもあたりまえにあるものを守って下さる方がいるんだと実感しました。	働き手の存在を知った	ー
知らない所で苦労して働いている人がいることがわかった。		ー
保育園に行ったことで自分が小さいときたくさんのことを教えてもらって育ったんだなと感じることができました。そして働くことの大切さを体験できたから。		働くことの大切さを知った
自分の将来なりたい所に行って、色々なことを、学ぶことができた。	仕事内容を知った（自分のなりたい）	ー
くわしくその仕事について知れたいいきっかけになりました。		ー
自分の進路を決める大きな判断材料になりました。		ー
将来の夢を考えるきっかけになりました。		ー
仕事内容を詳しく知ることができた。		ー
こんな仕事もあるんだななど色々なことを知れたから	仕事内容を知った（自分の知らない）	ー
身近な職業の裏側が知れて、おもしろかった。		面白かった
とても楽しかったし、学べることも多かった。		楽しかった
すごいなと思った	感心した	ー

29 人中 14 人が、感想で具体的な記述をしていた。それがばらばらでは分析にならない。この言わば意味の「カオス」を理解する方法について、「序章（４）」で詳しく説明した。しかし、ここでも簡単に説明する。

記述の意味の共通性に注目し、集約して理解できるように（「コード化する」という言い方をした）略称（「ラベル」という言い方をした）を付した。ひとりの記述においても、意味の違いに注目すると、２つ（複数）のラベルをもつ場合もある。その場合は、第１の内容を「分類コード 1」に表記し、第２の内容を「分類コード 2」に表記した。すなわち、ひとりの記述に２つのラベルを付けた場合もある。

生徒の参考になったことのラベルは、概ね８つに分類できる。しかし、「感心した」、「面白かった」、「楽しかった」はニュアンスに多少の違いはある大差ないと評価した。それを一括りにしてラベルは６つだと考えた。次頁の図表９は、ラベルを取り出し数的な趨勢を確認する形で作表したものである。前述したようにひとりの記述に複数のラベルがある。そのため、ラベル毎に件数を数え（度数）、生徒数（n＝母数）で除したものを内訳（%）に表記した。度数は母数を上回る場合がある（100%を超える場合がある）。

多いものからあげると、当然と言えば当然の「仕事内容を知った」の８件（57.1%、「記述あり」中の内訳。以下同様）である。しかしながら、既に就きたい仕事をもっている生徒が「自分のなりたい仕事」という意味で「知った」場合（5 件、35.7%）と、それがない生徒が「自分の知らない仕事」の内容を「知った」場合（3 件、21.4%）では違うのではないかと考えて区別した（具体的な記述内容は図表８参照）。前者は町内に存在する仕事の確認をしたというような意味であり、後者はキャリア教育が意図するような興味をもたせるというような意味であろう。言葉としては、「こんな仕事もあるんだ」や「裏側」

が使用されているのはそのことを表していると考えた。

図表９　「大樹学」の感想で職業体験を「参考になったこと」として記述した生徒の分類

ラベル		度数(件)	「記述あり」中の内訳(%)	職業体験の評価した生徒中の内訳(%)
貴重な機会だ		2	14.3	6.9
働き手の存在を知った		3	21.4	10.3
働くことの大切さがわかった		1	7.1	3.4
仕事内容を知った	自分のなりたい職業として	5	35.7	17.2
	知らない職業を	3	21.4	10.3
面白かった・楽しかった・感心した		3	21.4	10.3
小計(n=14人)		17	121.4	58.6
N.A.		15	ー	51.7
計(n=29人)		32	ー	110.3

次いで、「働き手の存在を知った」とでも命名することのできることをあげていた（3件、21.4%）。この職業体験の参考の在り方は非常に興味深い。キャリア教育が意図するような、自分の進路構想のリソース（手段）として「職業体験」を捉えていないからだ。「働くことの大切さがわかった」（1件、7.1%）も同種の質を感じた。

逆に、「貴重な機会だ」（2件、14.3%）は「仕事の内容を知った」（自分の知らない）という意味に近いが、仕事そのものからは少し離れていると考えた。

「働き手の存在を知った」と「働くことの大切さがわかった」を除いて、自分の位置から、職業体験の善し悪しを評価した感想であることを指摘できる。

ところで、「ふるさと学習に関わることを答えた生徒」は9人（22.0%）と多くない。「大樹学」がキャリア教育に寄せて構成されていることが大きく影響していることがわかる。このような意味で、「大樹学」が目指す「子ども像」の「ふるさと大樹に誇りをもち、社会に貢献できる子ども」の追求は、地方の進路指導におけるクリティカルな時期、すなわち中学校段階の進路指導の力によって、中断を迫られていそうだ。しかし、この生徒評価は尚早かもしれない。先ほどの「職場体験」での評価に、「働き手の存在を知った」のように、例えキャリア教育に引っ張られる形であっても、それが（大人の）仕事を介して地域に対するアイデンティティを育んでいると考えられる場合もあるからだ。

図表８と同様の手続きで、「ふるさと学習に関わること」を答えた生徒9人の具体的な記述を検討してみよう。次頁の図表１０である。全ての生徒が内容を記述していた。

自分が「楽しかった」（楽しんだ）ということもあるのだが、「感謝」（ラベル）や「町の良さがわかった」（ラベル）とまとめられるものは、個人の満足を越えて、そのような場を創ってくれる大人への感謝、そのような大人がいる町の良さを感じたというものになっている。ここでは確かに、「大樹学」が目指す子ども像を追求する働きかけを受け止め

ている生徒の存在がうかがえる。

図表１０　「大樹学」の感想で「ふるさと学習に関わること」を答えた生徒（9 人）の具体的な内容とコード化

「記述あり」生徒の具体的な記述	ラベル	印象的な体験
楽しく遊ぶことができた。中島に行ってバター作りをしたのが印象的です。	楽しい	バターづくり
自然の中でしか体験出来ないものが体験出来てとても楽しかった。		自然体験
とても子どもたちの事を考えてくれていて、うれしかった。印象にのこったものは、地引き網体験。	感謝	地引き網体験
自分が知らないことをたくさん教えてくれるからタメになるものばかりです。		ー
大樹町の良い点がたくさん分かった。	町の良さがわかった	ー
町民のみなさんの人がらの良さや自然にめぐまれているなと感じた。・漁業体験		漁業体験
大樹の魅力を感じることができていた。		ー
漁業体験	個別のこと	漁業体験
宇宙についての講演		宇宙の講演

「印象的な体験」で記述されていたものも、大樹町の自然と第一次産業、そして民間のロケット打ち上げ会社[20]の存する町に住む生徒の体験である。

数的な趨勢も併せて、ラベルで整理し直したのが図表１１である。

図表１１　「大樹学」の感想で「ふるさと学習に関わること」を選択した生徒（9 人）の内容（ラベル）の数的内訳

ラベル	度数(件)	内訳%
楽しく遊ぶ	2	22.2
感謝	2	22.2
町の良さがわかった	3	33.3
具体的なこと	2	22.2
計(n=9人)	9	100.0

第３節　キャリア教育の評価

大樹中学校のキャリア教育は、「総合的な学習の時間」を中心に行事を組み合わせたものである。直接的な進路指導は、特別活動（学級活動）において集団的に・個別的に行われる。「総合的な学習の時間」で取り組まれたことを、担当教員からいただいた資料を元に説明する。

それぞれの学年ごとに中心的な課題は２つずつ設定されている。

第１学年は、「ジョブシャドウイング」（行事）と「高等学校調べ」である。「ジョブシャドウイング」は耳慣れないと思うが、職場で働いている労働者を生徒が密着観察する形

[20] 株式会社インターステラテクノロジズが所在している。

式で行われるキャリア教育である。アメリカのキャリア教育で行われた方法が、日本に輸入されたものである。「高等学校調べ」が第１学年で行われるのは、早いと思う。上級学校への動機づけを早い内にしておきたいと考えているのであろう。

第２学年は、「職場体験学習」（行事）と「修学旅行」の準備である。すなわち、「大樹学」の「職場体験学習」はキャリア教育としても位置づいていた。

第３学年は、「修学旅行」（行事）と「進路実現に向け」た具体的な進路指導を補完する内容で実施される。「修学旅行」は、４月に実施され、「キッザニア東京」[21]への訪問を目玉としている。さらに全日空の機体整備工場の見学も行う。北海道の中学校の修学旅行としては異例であるだろう。

キャリア教育の「参考になったこと」「印象に残ったこと」を自由記述方式で聞いた。「大樹学」同様、該当する行事を答えた回答が多かった（例えば、「修学旅行」）。どこがそうであったのかという理由のない記述もあった。そのため、「何が」参考になったか、あるいは印象に残ったのかに注目し分類した。図表１２である。また、２つの別々の内容を記述した生徒もいたため、複数回答として扱った場合もある。そのため、度数（件）が母数（人）を超えている。

図表１２　キャリア教育で「参考になったこと」

	度数(件)	内訳%
修学旅行	24	58.5
職業体験	16	39.0
なし	1	2.4
N.A.	3	7.3
計(n=41人)	44	107.3

「修学旅行」が参考になったことがわかる（24 件、58.5%）。これに、「職業体験」が続く（16 件、39.0%）。両者を重複する形で記述した生徒は３人、「N.A.」が３人で、「なし」が１人である。

具体的な内容の記述をした生徒は、「修学旅行」に８人、「職場体験」に２人いた。また、第１学年の「ジョブシャドウイング」と「高等学校調べ」はなかった。それぞれの具体的な「参考になったこと」を次頁の図１３に掲げた。

具体的な記述を共通に注目し、コード化した。

「修学旅行」では、「世界が広がった」とでも言えるものが４件と多い。「様々な職業の存在を知った」が３件、「希望の職業を考えた」が３件となっている。「世界が広がった」のは、東京を見たからである。そして、「様々な職業の存在を知った」のはキッザニア東京に行ったからである。それに比して、「職業体験」は少しニュアンスが違うような気もするが確証はもてない。

[21] オフィシャルサイトの URL は、https://www.kidzania.jp/tokyo/で職業体験を行う商業施設である（2021 年３月 18 日閲覧）。

図表１３　キャリア教育で「参考になったこと」のなかで
具体的な記述をした生徒（10 人）の内容

	内容	ラベル				
		世界が広がった	様々な職業の存在を知った	希望の職業(仕事)を考えた	自分の適性を知った	仕事の大変さが判った
「修学旅行」を挙げた生徒(n=8人)	東京という都心に出てみて、大きいまちでお店をもってみたいと強く思った。	○				
	東京に行って大樹とのちがいや良さがわかった	○				
	大樹と東京を比べることができた。	○				
	全て印象深いですが修学旅行で世界感を一気に広げられました。	○				
	いろんな職業があり、どうやって自分がなりたいものになれるのか考えるきっかけになりました。		○	○		
	色々な仕事を体験させてもらって自分は何がしたいのかをしぼることができた。		○	○		
	キッザニアでたくさんの職業を見れたこと。		○			
	キッザニアでは、自分に向いているのとそうでないものが分かった。				○	
「職業体験」を理由に挙げた生徒(n=2人)	仕事の大変さ					○
	自分の夢を見つけることができた。			○		
計(件)		4	3	3	1	1

※　修学旅行のキーワードは、「キッザニア」と「東京」であった。

図表１３を数的な趨勢も加味し、ラベル別に再整理した（図表１４）。参考に掲げておく。

図表１４　キャリア教育で「参考になったこと」のなかで
具体的な記述をした生徒（10 人）の内容（ラベル）の数的内訳

ラベル	「修学旅行」選択(n=8人)の理由		「職業体験」選択(n=2人)の理由		計(n=10人)	
	度数(件)	内訳%	度数(件)	内訳%	度数(件)	内訳%
世界が拡がった	4	50.0	0	0.0	4	40.0
様々な職業の存在を知った	3	37.5	0	0.0	3	30.0
希望の職業(仕事)を考えた	2	25.0	1	50.0	3	30.0
自分の適性を知った	1	12.5	0	0.0	1	10.0
仕事の大変さが判った	0	0.0	1	50.0	1	10.0
計	10	125.0	2	100.0	12	120.0

第４節　「大樹学」とキャリア教育の関係

ここまで見てきたように、「大樹学」とキャリア教育の関係は複雑である。そのため生

徒の「参考になったこと」の関係という観点から、整理検討してみる。

ここでは「大樹学」の側から、「参考になったこと」として「職業体験」を選択した場合と「ふるさと学習に関わること」を選択した場合で、キャリア教育の「参考になったこと」が、「修学旅行」にあるのか「職業体験」にあるのかを、クロス表を作成することで検討する。

予め断っておくが、クロス表の分析では関係があるかないかがわかるだけである。因果関係を説明するものではない。また、「大樹学」を起点にしたのは、回答の重複（「職業体験」と「ふるさと学習に関すること」）がないからである。

まず、「参考になったこと」に記述数の多かった「修学旅行」との関係を検討する（図表１５）。

図表１５　「大樹学」の「参考になったこと」
×「修学旅行」（キャリア教育の「参考になったこと」）

			「修学旅行」（キャリア教育の「参考になったこと」）		合計
			該当	非該当	
「大樹学」の「参考になったこと」	職業体験	度数（件）	17	11	28
		内訳（%）	60.7	39.3	100.0
	ふるさと教育	度数（件）	7	2	9
		内訳（%）	77.8	22.2	100.0
	その他	度数（件）	0	1	1
		内訳（%）	0.0	100.0	100.0
合計		度数（件）	24	14	38
		内訳（%）	63.2	36.8	100.0

※　キャリア教育で「参考になったこと」の「N.A.」を除いた。

「大樹学」の「参考になったこと」として「ふるさと学習に関すること」を記述した場合には、キャリア教育の「参考になったこと」として「修学旅行」を記述した生徒が、相対的に多いと言えそうだ。職業に結び付かない体験同士（「ふるさと」と「旅行」）の繋がりが強いことになる。

次に、「職業体験」を記述した場合の関係である（次頁の図表１６）。

今度は逆になっている。「ふるさと学習に関すること」を記述した場合は、「職業体験」を記述する生徒は相対的に少ないと言えそうだ。図表１５での推論を支持する結果であると考えられる。

注目点を替えてみよう。「大樹学」の「参考になったこと」で「職業体験」を記述した場合でも、キャリア教育の「参考になったこと」で「職業体験」を記述した場合が５割を切ることに注目してみたいと思う。

キャリア教育の「参考になったこと」が、「修学旅行」に強く引っ張られているからだ

とも考えられる。すなわち、「大樹学」の「参考になったこと」と重複するから記述しなかった生徒も多かったのではないか（「職業体験」は両方に位置づいているため判別が難しい）とも推測できる。しかし、もう少し考えてみたい。

図表１６　「大樹学」の「参考になったこと」
×「職業体験」（キャリア教育の「参考になったこと」）

			「職業体験」(キャリア教育の「参考になったこと」)		合計
			該当	非該当	
「大樹学」の「参考になったこと」	職業体験	度数(件)	13	15	28
		内訳(%)	46.4	53.6	100.0
	ふるさと教育	度数(件)	3	6	9
		内訳(%)	33.3	66.7	100.0
	その他	度数(件)	0	1	1
		内訳(%)	0.0	100.0	100.0
合計		度数(件)	16	22	38
		内訳(%)	42.1	57.9	100.0

※ キャリア教育で「参考になったこと」の「N.A.」を除いた。

生徒にとって両者がシームレスなものとして意識されていると考えてみる。そうすると、「大樹学」の「参考になったこと」感想には「職業体験」が多く記述され、キャリア教育の「参考になったこと」には「修学旅行」が多く記述された。共通項は２つの「職業体験」（分析として区別できない）である。これら全体を、未来を先取り的に経験する（学ぶ）広がり（「参考になったこと」）として理解できるとしよう。そうであるなら、以下のように整理できる。

①大樹町という地域に基礎をおく広い経験としての「大樹学」（「ふるさと学習に関わること」）

②大樹町における「職業体験」（地方の仕事の経験であるが、生徒はこれを通して未来を展望する）

③キッザニア東京等における「職業体験」（都市の仕事の経験。これも未来を展望するリソースである）

④（大樹町を飛び出した）東京等の広い世界（地元＝大樹町を離れるという（未来の次元も含む）意味もある）をみる「修学旅行」（短期であるため、時間的な幅はない。また、キッザニア等の経験も仕事を続ける人＝労働者という性格は弱い。そのため、消費的なものに引きつけられがちであると考えられる）

体験の幅が、場所的（地元大樹町と東京）に、そして時間的（現在と未来の職業・生活）にスペクトル状に広がり、両方が参照されていると考えられる。

このように考えるなら、生徒が欲している体験は、場所と未来を展望する素材としての

体験であると考えられる。必ずしも職業に固定されているのではなさそうだ。単純な集計でも、①と②では②が優性だが、③と④では④が優性である。

試論的解釈となってしまったことをお詫びする。ところで、序章のキャリア教育の検討では、「キャリア教育を前提とする「夢」を、職業に限定することと個人的なものに限定することの、２つの「縛り」から解放することが必要である」と書いた。大樹中学校の２つの実践（「大樹学」とキャリア教育）は、「職業」に強く引き寄せられている。その中でも、「修学旅行」という体験から地方の中学生が得たいと考えることには、重要な示唆が込められていると受け取る必要があると考える。「個人的なもの」からの解放の点の検討は、不十分になった。しかし、「大樹学」の「職業体験」に若干だがその気づきがあったこと（「働き手の存在を知った」）は指摘できると思う。

第５節　大樹町の評価――大樹町の「良いところ」と「良くないところ」の理由づけの考察

本報告書で解明を目指す第１の研究テーマは、生徒の地域アイデンティティである。それを多角的に分析する。まず、単純に町への好悪を「３択方式」で聞いた（図表１７）。

図表１７　大樹町の評価（「３択方式」）

	度数(人)	内訳%
好き	19	46.3
半々	21	51.2
嫌い	1	2.4
計	41	100.0

「好き」が 19 人（46.3%）、「半々」が 21 人（51.2%）、「嫌い」が１人（2.4%）である。「半々」が最も多い。しかし５割を少し超えたところで、「好き」と拮抗している。この間、筆者が行った調査においても、判断の根拠等を尋ねた質問の回答から、実質的に「嫌い」であっても、それに○（まる）は付けづらいものである。そして重要なのは、判断そのものではなく、その理由づけになる。そのため、改めて大樹町の「良いところ」と「良くないところ」について質問してある。

（１）大樹町の「良いところ」と「良くないところ」の単純比較

まず、大樹町の「良いところ」である（次頁の図表１８）。「N.A.」の１人が除かれている。

自由記述方式で聞いているため、ひとつの自由記述に複数の回答が含まれる場合が多い。生徒数 40 人で回答数が 88 件、すなわちひとりで２件以上答えたことになっている。また、個別の記述を比較し、類似するものはまとめた形で個別の内容と考えた。全体で、異なる 20 の内容があった。その内、10%を超えるものを紹介しよう。

図表１８　大樹町の「良いところ」

	度数(件)	内訳(%)
豊かな自然がある	21	52.5
住民がやさしい	12	30.0
住みやすい	7	17.5
空気が良い・美味しい	5	12.5
食べ物が美味しい	5	12.5
町がきれい	5	12.5
ロケットが有名	5	12.5
最小限の店がある	4	10.0
来町者が多い	4	10.0
教育に手厚い	4	10.0
安全・平和	3	7.5

左から続き	度数(件)	内訳(%)
静か	3	7.5
町の雰囲気が明るい	2	5.0
独自のもの・特徴がある	2	5.0
自然体験イベントがある	1	2.5
水が美味しい	1	2.5
名前を覚えてくれる	1	2.5
町を良くしようとしている	1	2.5
交通面が良い	1	2.5
なし	1	2.5
計(n=40人)	88	220.0

※ N.Aの1人が除かれているため、母数(n)は40人である。

「豊かな自然がある」が 21 件（52.5%）で最多である。「住民がやさしい」が 12 件（30.0%）でそれに次ぐ。以下、「住みやすい」、「空気が良い・美味しい」、「食べ物が美味しい」、「町がきれい」、「ロケットが有名」5 件（12.5%）である。そして、「最小限の店がある」、「来町者が多い」、「教育に手厚い」が 4 件（10.0%）である。「自然」や「住みやすさ」関わる評価が高いことがわかる。個別の内容の構造や構図がどうなっているかは、後述する。

大樹町の「良くないところ」を自由記述してもらったものを、図表１８と同様の方法でまとめたのが図表１９である。これも、度数の大きいものから並べている。「N.A.」.の 3 人は除かれている。その内、10%を超えるものを紹介しよう。

図表１９　大樹町の「良くないところ」

	度数(件)	内訳(%)
店がない	15	39.5
商業的な遊び場がない	7	18.4
買い物が不便	6	15.8
安全な遊び場がない	4	10.5
街灯が少ない	2	5.3
人が少ない・人口減少	2	5.3
高齢化	2	5.3
空き家・空き地が多い	2	5.3
町の衰退	2	5.3
交通が不便	2	5.3

左から続き	度数(件)	内訳(%)
環境が悪い	2	5.3
町民が協力的でない	2	5.3
「良くないところ」はない	2	5.3
イベントがない・少ない	1	2.6
見る場所がない	1	2.6
体験できる場所がない	1	2.6
施設がない	1	2.6
道が悪い	1	2.6
伐採しすぎ	1	2.6
計(n=38人)	56	147.4

※ N.Aの3人が除かれているため、母数(n)は38人である。

「店がない」が 15 件（39.5%）と最も多い。そして、「商業的な遊び場がない」が 7 件（18.4%）、「買い物が不便」6 件（15.8%）と消費生活の豊かさに関わるようなものが「ない」ことが、「良くないところ」としてあげられている。この点に注目する必要がある。そして、前述の「遊び場」とは少し意味が異なる「安全な遊び場が少ない」が 4 件

（10.5%）である。

生徒にとっての大樹町の「良いところ」は「自然」があって「住みやすい」点、「良くないところ」は消費生活の豊かさが「ない」あるいは感じられない点にある。

ここで分析を止めてしまえば、「良いところ」と「良くないところ」について一般的な印象の理解を超えることはできない。そのため、序章（４）の分析方法（「質的コード化の技法」）を行使して、「ラベル」（以下、カッコを省略）として分類し検討を深める。ここまでのコード化によるラベルの作成と同様の作業であるが、それをもう一段行って抽象度をさらに高めている点が異なる。

（２）大樹町の「良いところ」のラベルと他中学との比較

大樹町の「良いところ」を、図表１８からさらに整理したのが次頁の図表２０である。ラベルを付けた点が異なる。

ラベルは次のように作成した。例をあげて説明する。

まず、図表１８の「良いところ」（内容）のそれぞれを「要素」（以下、カッコを省略）として考える。意味的な最小単位である。この要素同士を比較し、類似するものをまとめる。共通する意味に注目してラベル名をつける。すなわち、「要素⇒ラベル」という序列で、意味を集約しているわけだ。具体的に説明しよう。

例えば、「豊かな自然」は、「空気が良い・美味しい」、「食べ物が美味しい」、「自然体験イベントがある」、「水が美味しい」と類似していると考えることができる。細かな違いはある。しかし、他の要素との質的な違いに注目すると、「近い」と判断できる。そして、これらを一括りにして、「豊かな自然」というラベルとした。

同様の理由で、「最小限の店がある」、「交通面が良い」をまとめて、「近隣町村より良い」というラベルを作成した。「住民がやさしい」、「住みやすい」、「安全・平和」、「静か」、「名前を覚えてくれる」をまとめて、「穏やかな地域社会」とした。「ロケットが有名」、「町がきれい」、「来町者が多い」、「町の雰囲気が明るい」、「独自のもの・特徴がある」をまとめて、「誇れる町」とした。「教育に手厚い」、「町を良くしようとしている」をまとめて、「町の努力」とした。「良いところ」なしは、そのままである。

さらに、要素をラベルにまとめるときに、要素の度数の重複を除外して計算した。例えば、ある生徒が「空気が良い・美味しい」と「水が美味しい」を同時に記述したの場合、要素としては 2 件として数える。しかし、「豊かな自然」ラベルとしては共通しているので 1 件として数えたという具合である。そのため、「豊かな自然」の場合、要素の度数の単純合計は 33 件であるが、ラベルとしては 24 件である。全体としては要素の単純合計 88 件が、ラベルとしては 68 件となっている。

図表２０　大樹町の「良いところ」の整理（ラベル）

ラベル	度数(件)	内訳(%)	要素	度数(件)	内訳(%)
豊かな自然	24	60.0	豊かな自然がある	21	52.5
			空気が良い・美味しい	5	12.5
			食べ物が美味しい	5	12.5
			自然体験イベントがある	1	2.5
			水が美味しい	1	2.5
近隣町村より良い	4	10.0	最小限の店がある	4	10.0
			交通面が良い	1	2.5
穏やかな地域社会	20	50.0	住民がやさしい	12	30.0
			住みやすい	7	17.5
			安全・平和	3	7.5
			静か	3	7.5
			名前を覚えてくれる	1	2.5
誇れる町	15	37.5	ロケットが有名	5	12.5
			町がきれい	5	12.5
			来町者が多い	4	10.0
			町の雰囲気が明るい	2	5.0
			独自のもの・特徴がある	2	5.0
町の努力	4	10.0	教育に手厚い	4	10.0
			町を良くしようとしている	1	2.5
「良いところ」なし	1	2.5	「良いところ」なし	1	2.5
ラベルに該当する母数(n=40人)	68	170.0	要素に該当する母数(n=40)	88	220.0

大樹町の「良いところ」をラベルとして整理した上で、再検討する。多いもの順にあげてみる。

「豊かな自然」が 24 件（60.0%）、「穏やかな地域社会」が 20 件（50.0%）、「誇れる町」が 15 件（37.5%）と続いている。そして、「近隣町村より良い」と「町の努力」が 4 件（10.0%）となっている。自由記述の意味の「カオス」は多少明解になっただろうか。

要素として大きかった「豊かな自然がある」と「住民がやさしい」を核にして、意味的に近いものを集めて、「豊かな自然」ラベルと「穏やかな地域社会」ラベルが形成されていると考えることができる。

ところで筆者は、序章で記述したように、これまでオホーツク総合振興局管内や上川総合振興局管内の町村立中学校の中学３年生を対象として類似の調査を行ってきた。本報告書同様に、町村の「良いところ」と「良くないところ」を自由記述方式で回答してもらい、コード化を行った（次頁の図表２１では「カテゴリ」という名称になっている）。これを用いて、生徒の「良いところ」（ラベル）の補足説明をする。

まず、図表のアルファベット N、O、S は３つの中学校の略称である。次に、N 中学校は２つあるが、実施年度が異なる（2013 年度と 2015 年度）。それぞれの年度の中学３年生を対象としている。これを参考にして、大樹町の生徒の「良いところ」の特徴を明らか

にする。

図表２１　他地域中学校の地域の「良いところ」（参考）

	2016年度O中学校		2013年度N中学校		2015年度N中学校		2018年度S中学校	
	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)
自然評価	自然のめぐみがある	96	自然のめぐみがある	30	自然のめぐみがある	27	自然のめぐみ	81
生活評価	生活が穏やか	67	生活しやすい	30	生活が穏やか	73	生活が穏やか	34
			環境が良い	60				
産業評価	第1次産業が盛ん	17					林業が盛ん	3
地域の取り組み評価	地域の取り組みがある	13			自治体の取り組みがある	27	地域の取り組みがある	19
体験可能性評価					体験可能性がある	9		
なし			なし	20	なし	18		
計		192		140		155		138

※　単純計と「計」が四捨五入の関係で合わない場合がある。

カテゴリを内容面から整理すると、「自然評価」、「生活評価」、「産業評価」、「地域の取り組み評価」、「体験可能性評価」、「なし」から構成されていた。ジャンル的な意味のようだ。評価の具体的な内容は、カテゴリ名を参照していただきたい。そして評価としては同じものに括れるが、具体的な内容は中学校や年度で大きな差があった。

大樹町の「豊かな自然」は「自然評価」に、「穏やかな生活」は「生活評価」に、「町の努力」は「地域の取り組み評価」に対応していると考えられる。大樹町に存在して、他中学校にないのは、「誇れる町」と「近隣町村より良い」である。「誇れる町」は内容的には一部「産業評価」と重なっているかもしれない。しかしながら、「誇れる町」が多い点や「近隣町村より良い」が特徴であると考えられる。

逆に、他中学校に存在して、大樹中学校にないのは「体験可能性評価」である。

さて、大樹中学校の事例に戻ろう。

（３）大樹町の「良くないところ」のラベルと他中学との比較

同様の手順で、「良くないところ」のラベルの分類を行った結果が図表２２である。要素の単純合計が 56 件であるのに比して、ラベルの計は 42 件とかなり集約されている。

ラベルは、次のように付けた。

「環境が悪い」は、「伐採しすぎ」と類似していると考えてみたい。内容的には違いはあるのだが、他の要素との質的な違いに注目して「近い」と判断した。「環境が悪い」は自然環境の問題ではないと判断し、これを、「産業の悪影響がある」とした。同様の手順で、「店がない」、「商業的な遊び場がない」、「買い物が不便」、「イベントがない・少ない」、「見る場所がない」、「体験できる場所がない」を、「消費文化へのアクセスが悪い」とした。「町民が協力的でない」はそのままでも良いのだが、「良いところ」との対応を考

えて、ラベル名は「問題ある町民」とした。「人が少ない・人口減少」、「高齢化」、「空き家・空き地が多い」、「町の衰退」を、「衰退する町」とした。「安全な遊び場がない」、「街灯が少ない」、「道が悪い」、「施設がない」を「設備が不十分」とした。「良くないところ」なしは、そのままである。

図表２２　大樹町の「良くないところ」の整理（ラベル）

ラベル	度数(件)	内訳(%)	要素	度数(件)	内訳(%)
産業の悪影響がある	3	7.9	環境が悪い	2	5.3
			伐採しすぎ	1	2.6
消費文化へのアクセスが悪い	23	60.5	店がない	15	39.5
			商業的な遊び場がない	7	18.4
			買い物が不便	6	15.8
			交通が不便	2	5.3
			イベントがない・少ない	1	2.6
			見る場所がない	1	2.6
			体験できる場所がない	1	2.6
問題ある町民	2	5.3	町民が協力的でない	2	5.3
衰退する町	5	13.2	人が少ない・人口減少	2	5.3
			高齢化	2	5.3
			空き家・空き地が多い	2	5.3
			町の衰退	2	5.3
設備が不十分	7	18.4	安全な遊び場がない	4	10.5
			街灯が少ない	2	5.3
			道が悪い	1	2.6
			施設がない	1	2.6
「良くないところ」なし	2	5.3	「良くないところ」なし	2	5.3
コードに該当する度数計(n=38人)	42	110.5	要素に該当する度数の単純計(n=38人)	56	147.4

大樹町の「良くないところ」をラベルに整理した形で、再検討する。多いものから順にあげてみる。ラベルの度数は要素の重複を除外してある。

「消費文化へのアクセスが悪い」が 23 件（60.5%）で圧倒的である。さらに「設備が不十分」が 7 件（18.4%）、「衰退する町」が 5 件（13.2%）、「産業の悪影響がある」が 3 件（7.9%）、「問題ある町民」、「良くないところ」なしがそれぞれ 2 件（5.3%）となった。

要素として大きかった第１～３位の「店がない」、「商業的な遊び場がない」、「買い物が不便」が集中し、「消費文化へのアクセスが悪い」ラベルが大きくなったと考えられる。

これも図表２１と同様に筆者がこれまでに行ってきた他中学校の結果と比較することで、大樹中学校の特徴を考えてみたい（次頁の図表２３）。

カテゴリを内容面から整理すると、「地域社会評価」、「自然評価」、「産業評価」、「自治体評価」、「なし」から構成されていた。具体的な内容は、カテゴリ名を参照していただきたい。そして「地域評価」は「「都市」との比較」と「村の特徴」に区別され、前者に「「都市」にあるはずのものがない」、「「ワクワク」感がない」、「田舎者性」、「消費文化へ

のアクセスが悪い」、「都市に比べ劣っている」と本質的には共通するが言葉としてはバリエーションがある内容が含まれていた。どれも否定的な地域評価である。「田舎者性」を除いて、共通するのは消費市場的な価値の観点から、地方を劣位だと考えた評価であるということである。それぞれの内訳の差はかなり大きい[22]。

図表２３　他中学校の地域の「良くないところ」（参考）

		2016年度O中学校		2013年度N中学校		2015年度N中学校		2018年度S中学校	
		カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)	カテゴリ名	内訳(%)
地域社会評価	「都市」との比較	「都市」にあるはずのものがない	71	「都市」にあるはずのものがない	190			消費文化へのアクセスが悪い	67
		「ワクワク」感がない	33					都市に比べて劣っている	10
		田舎者性	13						
	村の特徴					不便	36		
						村の特徴が嫌い	45		
						村内の対立	18		
自然評価				自然が嫌い	40	自然が嫌い	27	自然が厳しい	13
産業評価		停滞する観光業	4						
自治体評価		自治体行政問題	8	自治体が良くない	10	自治体が良くない	9	自治体行政問題	30
なし		特になし	13	なし	10	なし	9	特になし	3
計			142		250		144		116

※　2015年度N中学校については、「N.A.」を除いたため、計が異なっている。
※　単純計と「計」が四捨五入の関係で合わない場合がある。

大樹町の「消費文化へのアクセスが悪い」、「衰退する町」そして「問題ある町民」は「地域社会評価」に、「設備が不十分」は「自治体評価」に、「産業の悪影響がある」は「産業評価」に、重なっていると考えられる。その意味で、大差はない。しかしながら、他の中学校にある「自然が嫌い」がない点は特徴的であると考えられる。

そして、「消費文化へのアクセスが悪い」は「地域評価」の「「都市」との比較」に、「村の特徴」は、「衰退する町」と「問題ある町民」に対応していると考えられる。

さらに量的に言えば、大樹中学校の「消費文化へのアクセスが悪い」はＳ中学校と同レベルで、それほど高いわけではない。

ここまで、町の「良いところ」と「良くないところ」の自由記述から中学生の地域アイ

[22] この一連の比較研究で2015年度のＮ中学校３年生は他と大きく異なっていた。これが、本調査研究の元になる研究課題の発想の源となった。それは、他が（大樹中学校も含めて）市場的な価値から地方を劣位と判断する評価をもつのに比して、この年度の３年生は地域への具体的な関わり（「コミットメント」）が強く、しかも自分たちの学校・生活環境に関わる大人たちの決定に対して影響力を行使できないことに対して強く言えば不満を抱いていた（「インフルエンス」がないことへの不満）。そのため、雰囲気としての市場的な価値から地方を劣位と見る見方から、解放されていた。具体的な「問題」として意識されていた。そのため、関係性の中での劣位ではなく、具体的な「村の特徴」として理解できたのである。

デンティティを検討してきた。最後にこの「良いところ」と「良くないところ」がどのような対比の関係にあるのかを考えてみたい。

（４）大樹町の「良いところ」と「良くないところ」のラベル比較

図表２４　大樹町の「良いところ」と「良くないところ」の対比（ラベル）

ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
豊かな自然	豊かな自然がある	21	52.5
	空気が良い・美味しい	5	12.5
	食べ物が美味しい	5	12.5
	自然体験イベントがある	1	2.5
	水が美味しい	1	2.5
	小計	33	82.5
近隣町村より良い	最小限の店がある	4	10.0
	交通面が良い	1	2.5
	小計	5	12.5
穏やかな地域社会	住民がやさしい	12	30.0
	住みやすい	7	17.5
	安全・平和	3	7.5
	静か	3	7.5
	名前を覚えてくれる	1	2.5
	小計	26	65.0
誇れる町	ロケットが有名	5	12.5
	町がきれい	5	12.5
	来町者が多い	4	10.0
	町の雰囲気が明るい	2	5.0
	独自のもの・特徴がある	2	5.0
	小計	18	45.0
町の努力	町を良くしようとしている	1	2.5
	教育に手厚い	4	10.0
	小計	5	12.5
「良いところ」なし		1	2.5
度数の単純計(n=40人)		88	220.0

ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
産業の悪影響がある	環境が悪い	2	5.3
	伐採しすぎ	1	2.6
	小計	3	7.9
消費文化へのアクセスが悪い	店がない	15	39.5
	商業的な遊び場がない	7	18.4
	買い物が不便	6	15.8
	交通が不便	2	5.3
	イベントがない・少ない	1	2.6
	見る場所がない	1	2.6
	体験できる場所がない	1	2.6
	小計	33	86.8
問題ある町民	町民が協力的でない	2	5.3
	小計	2	5.3
衰退する町	人が少ない・人口減少	2	5.3
	高齢化	2	5.3
	空き家・空き地が多い	2	5.3
	町の衰退	2	5.3
	小計	8	21.1
設備が不十分	安全な遊び場がない	4	10.5
	街灯が少ない	2	5.3
	道が悪い	1	2.6
	施設がない	1	2.6
	小計	8	21.1
「良くないところ」なし		2	5.3
度数の単純計(n=38人)		56	147.4

「良いところ」と「良くないところ」を対比したのが図表２４である。対比の仕方（表示の仕方）を説明する。これは検討の余地がある暫定的なものであるが、以下のような対

比を考えている。

物理的な環境として「豊かな自然」と「産業の悪影響がある」を、他の市町村との比較として「近隣町村より良い」と「消費文化へのアクセスが悪い」を、社会生活の対比として「穏やかな地域社会」と「問題ある町民」を、町の自体に対する評価の対比として「誇れる町」と「衰退する町」を、自治体や町民の努力の対比として「町の努力」と「設備が不十分」を、「良いところ」なしと「良くないところ」なしを、対応させた。

生徒が注目する共通のことは、「環境」への評価（自然環境、市場的環境、生活環境)、「町アイデンティティ」(町イメージ、努力）からなっていると考えられる。

要素を取り除いて、ラベルだけにして量の比較をすることを考えて作成したのが、図表２５である。大小関係を確認しよう。

図表２５　大樹町の「良いところ」と「良くないところ」の対比（ラベルのみ）

ラベル	度数(件)	内訳(%)
豊かな自然がある	24	60.0
近隣町村より良い	4	10.0
穏やかな地域社会	20	50.0
誇れる町	15	37.5
町の努力	4	10.0
「良いところ」なし	1	2.5
度数の単純計(n=40人)	68	170.0

ラベル	度数(件)	内訳(%)
産業の悪影響がある	3	7.9
消費文化へのアクセスが悪い	23	60.5
問題のある町民	2	5.3
衰退する町	5	13.2
設備が不十分	7	18.4
「良くないところ」なし	2	5.3
度数の単純計(n=38人)	42	110.5

大樹町の評価が高いのは、自然環境と生活環境、そして町イメージである。順に、「豊かな自然がある」＞「産業の悪影響がある」、「穏やかな地域社会」＞「問題ある町民」、「誇れる町」＞「衰退する町」である。大樹町評価の良否という形で構成されていると考えられる。そしてこの差は、それぞれでかなり大きい。

大樹町の評価が低いのは、他地域との相対比較としての良否で構成されていると考えられること、「近隣町村より良い」＜「消費文化へのアクセスが悪い」である。そしてこの意味は、推測に止まるが、生徒もっと「消費文化へのアクセスが悪い」地域があることを知っており、それよりは「まし」という意味と、もっと「消費文化へのアクセスが悪」くない地域があることを知っている（例えば、帯広市）という序列の中で、大樹町の位置を理解している。この差もかなり大きい。しかこの相対評価であるという点は、筆者のオホーツク総合振興局管内や上川総合振興局管内の中学校の調査とは異なる。これらは絶対評価的なニュアンスであった。

町努力も、「町の努力」＜「設備が不十分」であるが、若干後者が多い程度である。

全体を総括するなら、生徒は大樹町の「良いところ」を強く評価していると言える。しかしながら、そこに消費市場上の格差構造である「消費文化へのアクセスが悪い」が食い込んでいると言える。

ここまで、生徒の大樹町への地域アイデンティティの考え方を多面的に考察してきた

が、その関係については分析できていない。その部分は、第２章の課題である。

第６節　大樹町にいるから「できること」と「できないこと」

生徒は、大樹町を生活の場所としている。そしてその生活には、特定の可能性と制限がある。「良いところ」と「良くないところ」の考察でも、そのことは垣間見えた。例えば、「良くないところ」の「消費文化へのアクセスが悪い」は、そのようなものとして理解することができる。都市で生活していれば当たり前に入手できるもの（可能性）が、入手できないところに根拠をもつ評価である。また逆に、「豊かな自然がある」というのも、それに触れることを通して行使できる自由があることに根拠をもった評価であるかもしれない。

そこで、生徒に大樹町にいるからこそ「できること」、「できないこと」を質問した。

まず、「できること」を検討する（図表２６）。

図表２６　大樹町にいるから「できること」

ラベル	度数(件)	内訳(%)	要素	度数(件)	内訳(%)
広義の自然体験	17	51.5	自然体験	12	36.4
			食べ物体験	3	9.1
			多様な自然遊び	4	12.1
社会的取り組みの体験	15	45.5	ロケット・宇宙体験	9	27.3
			産業体験	5	15.2
			地域での特徴的な体験	2	6.1
			地域社会との関わり	1	3.0
豊富な学校体験				2	6.1
いろいろな体験				1	3.0
くつろぎ				2	6.1
なし				1	3.0
小計(n=33人)				42	127.3
N.A.				8	−
合計(n=41人)				−	−

自由記述を、複数回答として扱うという方法を踏襲している。生徒数 41 人のうち 33 人が回答してくれた。内容的には、要素欄に並ぶもの、「豊富な学校体験」から「なし」までを含めて、11 の内容であった。要素欄の内容は、同種のものをまとめ、少し抽象化してある。さらに、要素の中でまとめることができるものに、「広義の自然体験」と相対的に区別できる「社会的取り組みの体験」の２つのラベルを付けてみた。

「社会的取り組みの体験」の中にも「自然」に関わるものはある。例えば、牛（酪農）に関わるものや地引き網体験である。しかしそれらは、あいだに人（酪農家や漁家の方）が入り、学校と地域が連携して行った取り組みでもあるので、区別した。このような点からいえば、「豊富な学校体験」や「いろいろな体験」は、「広義の自然体験」と「社会的取り組みの体験」に分類できなかったものでもある。その点から言うと、異色なのは「くつろぎ」であ

る。具体的には「ひなたぼっこ」ができることをこれに分類している。積極的な体験というよりも、他から働きかけられたもの「ではない」ものとしての体験である。

各要素では、「自然体験」（12 件、36.4%）と「ロケット・宇宙体験」（9 件、27.3%）が双璧である。これに続くのが、「産業体験」と「多様な自然遊び」である。

「広義の自然体験」（ラベル）が 17 件（51.5%）で、「社会的取り組みの体験」が 15 件（45.5%）と約半数となっている。大樹町は後者が豊富である。「大樹学」（「ふるさと学習」）実践の結果であると考えられる。これを生徒の約半数は、大樹町に住んでいるから「できること」として理解している。まとめとの関わりで強調しておくが、学校提供の「社会的取り組みの体験」であることに注意を喚起しておく。そして、だからこそ高校では、大樹町への社会的参加（コミットメント）の実践として、「高校生議会」に取り組んでいる。お客様としての体験を、「自分事」の参加・探究に変換するという新たな教育実践の余地を指摘しておく。

次に、「できないこと」を検討する（図表２７）。

図表２７　大樹町にいるから「できないこと」

ラベル	度数(件)	内訳(%)	要素	度数(件)	内訳(%)
(現代的)消費体験	22	73.3	(満足な)買い物	12	40.0
			都市的な遊び	8	26.7
			最先端に触れる	2	6.7
多様な職業体験				6	20.0
近場での用事の完結				2	6.7
海外経験				1	3.3
小計(n=30人)				31	103.3
N.A.				11	-
合計(n=41人)				-	-

同じく自由記述を加工したものである。生徒数 41 人のうち 30 人が回答してくれた。内容的には、要素欄に並ぶもの、「(満足な) 買い物」から「海外経験」までを含めて、６つの内容からなっていた。「できること」に比べて、多様性に乏しいと考えられる。要素欄の内容の扱い方は図表２６同様である。

要素の中でまとめることができるものはひとつだけであった。これに、「(現代的) 消費体験」のラベルを付けてみた。「買い物」に「(満足な)」と付けたのは、最低限の買い物という意味から、商品の豊富さの中からの選択（選べること)、「遊び」にも「都市で流行している」遊びという意味が付加されていたからである。ラベル名に「(現代的)」という言葉を付加したのも同様である。

要素では、「(満足な)買い物」（12 件、40.0%）と「都市的な遊び」（8 件、26.7%）が多い。「多様な職業体験」（6 件、20.0%）も多いが、ここにキャリア教育の影響を感じることができる。

「(現代的) 消費体験」（ラベル）は 22 件（73.3%）と多い。これは、大樹町の「良くな

いところ」で「消費文化へのアクセスが悪い」が上がっていたことと符合する。しかしながら、先のカッコの付加（「(満足な)」や「(現代的)」）で表現したように、大樹町でのそれは筆者の他の中学生の研究とは異なる。これまで曖昧な言い方で表現した通り、「相対的」な性格をもっていると考える。「(現代的) 消費体験」を生徒の約半数は、大樹町に住んでいるから「できないこと」として理解している。

生徒が理解する生活の可能性は、直接的な消費体験にあるいは、消費を媒介とした体験[23]に依っている。この大きさが理解できる。

そして中学生にとってできることは、受験勉強や学校での体験を除けば、「広義の自然体験」、「社会的取り組みの体験」、「(現代的) 消費体験」である。そして「司会的取り組みの体験」は学校経由で提供され、それをある意味享受する。大樹町という社会に参加する経験は少なく、それを「できること」としてとらえることは難しい。

第７節　生徒の将来の居住地志向

生徒の地域アイデンティティがどのように将来志向に影響しているのかを考えるために、まず将来志向を地理的な意味で把握したいと考えた。

ここでは図表を掲げることは割愛するが、生徒が「地元」と考える範囲も聞いた。約半数（51.2%）は、行政区分の大樹町と重なっていると考えていた。それより小さな場合もあった（町内の集落や市街。2 人、4.9%）。より広く「十勝」等を掲げた生徒は 12 人であった（29.3%）。十勝圏を「地元」として理解する場合も少なくない。

ところで、人生という時間軸を地域的な移動の観点から考えてみる。大樹町を起点おいて、「ずっと大樹町に残る」、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」、「大樹町からは出るが十勝には残る」、「大樹町を出てもどってこない」、「まだ決まってない」から選択してもらった。その結果が図表２８である。

図表２８　将来の居住地志向

	度数(人)	内訳(%)
ずっと大樹町に残る	6	14.6
いったん大樹町は出るが戻ってくる	8	19.5
大樹町からは出るが十勝には残る	14	34.1
十勝を出て戻ってこない	8	19.5
まだ決まっていない	1	2.4
N.A.	4	9.8
合計	41	100.0

[23] 「都市的な遊び」の具体的な内容で、「ラウンド・ワン」を挙げている生徒がいた。この「ラウンド・ワン」は、友人関係の多様な側面を切り開く可能性をもった媒介として理解しているのであろう。だから、「できないこと」に記述したのであろう。

最多は、「大樹町からは出るが十勝には残る」であった（14 人、34.1%）。順に、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」と「十勝を出て戻ってこない」が 8 人（19.5%）で拮抗している。「ずっと大樹町に残る」は 6 人（14.6%）と少ない。「まだ決まってない」は 1 人である。「N.A.」.は 4 人である。

将来の居住地志向の判断の根拠を考えるために、「住みたい場所」と「遊びたい場所」も聞いた。それをクロスしてみた。前者が図表２９、後者が図表３０である。最多のものを太字にした。この質問には回答のない生徒も多かった。

図表２９　地理的将来志向×「住みたい場所」

		住みたい場所								度数（件）
		大樹町	帯広市	十勝（帯広市以外）	札幌市	北海道（十勝、札幌以外）	東京	本州（東京以外）	日本外	
ずっと大樹町に残る（n=6人）	度数(人)	**3**	0	0	1	0	0	0	0	4
	内訳(%)	50.0	0.0	0.0	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	66.7
いったん大樹町は出るが戻ってくる(n=8人)	度数(人)	**3**	1	2	1	1	0	0	0	8
	内訳(%)	37.5	12.5	25.0	12.5	12.5	0.0	0.0	0.0	100.0
大樹町からは出るが十勝には残る(n=14人)	度数(人)	1	**8**	0	0	0	0	1	0	10
	内訳(%)	7.1	57.1	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	0.0	71.4
十勝を出て戻ってこない(n=8人)	度数(人)	0	1	0	1	0	**2**	**2**	1	7
	内訳(%)	0.0	12.5	0.0	12.5	0.0	25.0	25.0	12.5	87.5
まだ決まっていない（n=1人）	度数(人)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	内訳(%)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
N.A.(n=4人)	度数(人)	1	0	0	0	1	0	0	0	2
	内訳(%)	25.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	50.0
合計(n=41人)	度数(人)	8	**10**	2	3	2	2	3	1	31
	内訳(%)	19.5	24.4	4.9	7.3	4.9	4.9	7.3	2.4	75.6

※　最多のものを太字にした。

「ずっと大樹町に残る」や「いったん大樹町は出るが戻ってくる」を選択した場合、「住みたい場所」が大樹町になることは、当然であると考えられる。しかし、「ずっと大樹町に残る」でも札幌市が入り、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」はさらに帯広市や十勝圏が視野に入るし、札幌市や道内も同様である。

逆に、「大樹町からは出るが十勝には残る」の場合は、帯広市に集中する形となっている。周知のように十勝圏は帯広市を中心に、町村が四方に展開する形で存在している。生徒は、十勝圏に住むことを希望し、働く場所としては帯広市を現実的なものとして考えているのではないだろうか。他方で、「十勝を出て戻ってこない」は、「住みたい場所」として帯広市や札幌市も少数上がるが、道内も候補には入らない形で、東京都・本州に振れている。海外もある。

次に「遊びたい場所」である。

図表３０　地理的将来志向×「遊びたい場所」

		遊びたい場所							度数（件）
		帯広市	十勝（帯広市以外）	札幌市	北海道（十勝、札幌以外）	東京	本州（東京以外）	日本外	
ずっと大樹町に残る（n=6人）	度数(人)	0	0	1	0	**2**	0	0	3
	内訳(%)	0.0	0.0	16.7	0.0	33.3	0.0	0.0	50.0
いったん大樹町は出るが戻ってくる(n=8人)	度数(人)	2	0	**4**	2	2	0	0	10
	内訳(%)	25.0	0.0	50.0	25.0	25.0	0.0	0.0	125.0
大樹町からは出るが十勝には残る(n=14人)	度数(人)	**8**	0	3	0	2	0	0	13
	内訳(%)	57.1	0.0	21.4	0.0	14.3	0.0	0.0	92.9
十勝を出て戻ってこない(n=8人)	度数(人)	0	0	2	0	**3**	2	2	9
	内訳(%)	0.0	0.0	25.0	0.0	37.5	25.0	25.0	112.5
まだ決まっていない（n=1人）	度数(人)	0	0	0	0	0	0	0	0
	内訳(%)	0	0	0	0	0	0	0	0
N.A.(n=4人)	度数(人)	1	0	0	1	0	0	0	2
	内訳(%)	25.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	50.0
合計(n=41人)	度数(人)	**11**	0	10	3	9	2	2	37
	内訳(%)	26.8	0.0	24.4	7.3	22.0	4.9	4.9	90.2

※　最多のものを太字にした。

全体としては、近場の遊び場として帯広市、続いて札幌市が、そしてそれと大差なく東京都が選択されている。これには、修学旅行の東京体験も関わっていると思われるが、広く支持されている。

「ずっと大樹町に残る」の場合は、このように覚悟を決めているからこそ、東京が選択されているのであろう。「いったん大樹町は出るが戻ってくる」の場合は、札幌市を含め、幅が広い。「大樹町からは出るが十勝には残る」の場合は、逆に帯広市が現実的なものとして選択されているようだ。「十勝を出て戻ってこない」は拡散している。国外もある。

この３つの考察から以下のように考えられる。

生徒の生涯的な生活圏のパースペクティブにおいて、「ずっと大樹町に残る」は少ない。しかし、十勝圏（帯広市を核）はパースペクティブにしっかりと入っている。筆者がこれまでに行った研究の結果では、札幌市の存在感が高かったことと大きく異なる。同じことを逆方向から説明すると、十勝圏という生涯生活圏の中のひとつに、特定の事情で大樹町が入っていると考えても良いぐらいかもしれない。十勝という地域の存在感の高さが確認できるだろう。他方で遊ぶ場所としての位置は、東京も高く、帯広市、札幌市、東京が並行に並んで存在しているようだ。

第８節　生徒の進路志向

図表３１は、目前に迫った進路についてうかがった質問への回答を整理したものであ

る。

図表３１　中学卒業後の進路希望

	度数(人)	内訳(%)
町内の高校進学	12	29.3
帯広市の高校進学	20	48.8
町内、帯広市以外の高校進学	3	7.3
十勝圏以外の高校進学	5	12.2
高専進学	1	2.4
就職	0	0.0
計	41	100.0

町内の高校（大樹高校）への進学は３割弱である。帯広市内の高校進学が５割に迫る。それ以外の十勝圏への進学は少なく、十勝圏を超える場合は少しいる（5 人、12.2%）。高専進学は少ない。就職は０人である。

それ以降の進路希望について聞いたのが、図表３２である。

図表３２　高校卒業後の進路希望と高卒後に進学を希望する場合の進学先

	度数(人)	内訳(%)
進学希望	18	43.9
就職希望	8	19.5
進路未定	15	36.6
計	41	100.0

	度数(人)	内訳(%)
大学希望	13	72.2
専門学校希望	5	27.8
進学先未定	0	0.0
計	18	100.0

さらなる進学を希望するものは４割強であり、就職希望は２割ほどである。そして、4 割弱の生徒は進路未定である（図表左）。

続けて、進学希望の場合の進学先（希望）を聞いた。

大学が７割強で、専門学校が３割弱である。進学先未定が０人である。

ここまで３つの質問を検討してきた。高卒後の進路未定は当然のことながらあった。しかし筆者が驚いたのは、この一連の質問に関わって「N.A.」がないことである。９月調査だから、中学校卒業後の進路を決定しているのは当たり前だと思うかもしれない。しかし、ここが０人は少し驚く。そして、高卒後に進学を希望する際に、具体的な進学先（学校名等）は未検討であると推測されるが、進学先（大学か専門学校か）の未定が０人であるのはかなり驚いた。

大樹中学校の熱心なキャリア教育の取り組みは、「進路を考える」という点で暫定的であっても「判断する」ことを促している点で、貢献しているのは間違いないと思う。

第９節　生徒の職業的将来志向

生徒に将来就きたい職業も自由記述方式で聞いた。それを、こちらで「職業分類表」（厚

生労働省 2012 年 3 月改訂）により特定し、「大分類」で整理した（図表３３）。

図表３３　職業志向

	度数(件)	内訳(%)
管理的職業従事者	1	2.4
専門的･技術的職業従事者	15	36.6
事務従事者	2	4.9
販売従事者	0	0.0
サービス職業従事者	5	12.2
保安職業従事者	1	2.4
農林漁業従事者	3	7.3
生産工程従事者	5	12.2
公務員	2	4.9
なし	1	2.4
未定	1	2.4
N.A.	9	22.0
合計(n=41人)	45	109.8

進路未定等の場合でも、「就きたい職業」は記述してくれた生徒がいた。逆に、大学進学は希望していても職業は「N.A.」の場合もあった。図表に存する「なし」や「未定」は、書かれてある通りに記述したものである。また、職業分類を意識せずに記述している生徒も多いので、実感とは合わないかもしれない。

全体として、「専門的・技術的職業従事者」が多い（15 人、36.6%）。これには少し補足が必要である。15 人は、「医療系専門職」（「看護師」、「獣医師」、「医療系」の記述をこのように理解した。以下同様）、「社会福祉の専門的職業」（「保育士」）、「教育の職業」（「教師」）、「職業スポーツ家」（「サッカー選手」）、「情報通信技術者」（「AI、ロボット関連」）である。

これに、「サービス職業従事者」と「生産工程従事者」が続く（5 人、12.2%）。前者は「美容師」、「介護士」である。後者は、「自動車整備工」、「土木関係」、「建築関係」、「工場で働く」である。

「職業分類表」にはないが、職業的には分類しがたい「公務員」は別にした。

進路を分析した感想にも書いたが、中学校３年生の時点で、「暫定的に」ではあっても職業をイメージできているという点で、驚きである。

第１０節　生徒の将来生活志向

生徒の将来生活志向について検討する。

最初に、保護者から進路について言われていることを確認しておきたい。

単純に、「ある」「なし」という点で言えば、前者は 13 人で 3 割を少し超えるぐらいである。中学校３年生が進路の分岐点にあることを考えるのなら、この数字は少ないと考えることができる。保護者は、本当に何も言わないのかもしれない。しかし、生徒が聞いて

いてもそれとは理解していない場合や、覚えていない場合も相当数あるものと思われる。

具体的な内容は、以下の図表３４のようになる。内容は大まかに３つに類別できると考えた。「進路アドバイス」と「勉強に関すること」、「将来生活に関するアドバイス」の３つである。それぞれ 6 件、4 件、3 件である。

図表３４　保護者の将来へのアドバイス

【進路アドバイス(6件)】
・夢をおうのもいいけど、現実も考えて。
・自分の好きな所に行ってみろ
・自分がやりたいことを最大限にやろう！
・お金のことは気にしない
・自分のレベルと合っていて、将来に一歩でも近づける高校にしなさいと。
・自分の好きなように頑張って。
【勉強に関すること(4件)】
・合格圏内に入っていないから、しっかり勉強して頑張って。
・今やるべきことをしてからやりたいことをする
・数学と理科を特にがんばれと言われている
・とにかく勉強
【将来生活に関するアドバイス(2件)】
・安定した場所が良いよ
・生産量が少ないから大樹はむずかしいかも。苦しくなるかもと言われている。
※　一部表現は生徒が特定される可能性があるため改変した。

「進路アドバイス」は、全く逆の２つのベクトルから構成されている。「夢」と「現実」との関係に関するもので、前者を優先するものと、後者を優先するものからなる。折衷的なものは１件にとどまる。保護者として生徒の学習モチベーションを喚起する意図もあるのであろう。方向は異なるが、「夢」を追うなかで、努力を促していると考えられる。「勉強に関すること」は、中学校３年生の 9 月であることも関わっているので、勉強に励んでほしいという内容である。「将来生活に関するアドバイス」は、直接的な表現ではないが職業選択と関わっている。

保護者の職業との関わりも検討したが、詳細は割愛する。特徴は見られなかった。

本章の最後に、生徒の将来生活志向を分析する。次頁の図表３５である。

分析の手順は、他の自由記述方式で回答してもらったものと同様である。ひとつの回答も、要素に注目し、それが複数ある場合は、複数回答的に扱った。ラベルに集約された場合、さらにラベルからカテゴリへと集約された場合は、それぞれの段階で重複を除外して度数を再計算した。

生徒数は 41 人であるが、その内「N.A.」は 8 人であった。少し多いと考えられる。将来の生活はまだイメージにないのかもしれない。

ところで分析の仕方は、要素⇒ラベル⇒カテゴリと比較し、集約する方法を採っている。しかし説明においては、逆にカテゴリ（生活イメージの焦点）大きなものから出発する。

図表３５　将来生活志向

カテゴリ	度数(件)	内訳(%)	ラベル	度数(件)	内訳(%)	要素	度数(件)	内訳(%)
生活イメージ	30	90.9	満たされた生活	13	39.4	幸福	6	14.6
						楽しい	6	14.6
						温かい	2	4.9
						充実	1	2.4
			自由が利く生活	12	36.4	自由・したいことをする	3	7.3
						好きなものが買える	2	4.9
						好きな場所に住む	2	4.9
						持ち家をもつ	2	4.9
						生き物が飼える	2	4.9
						豊か	2	4.9
						好きなものに囲まれる	1	2.4
						便利	1	2.4
			波瀾のない生活	6	18.2	普通	2	4.9
						安全・安定	2	4.9
						平和	2	4.9
						疲れない	1	2.4
			家庭をもつ				4	9.8
			自立				3	7.3
			周囲を助ける				1	2.4
			健康的				1	2.4
仕事イメージ	5	15.2	安定収入				3	7.3
			職を得る				1	2.4
			やりがいがある仕事				1	2.4
その他イメージ	3	9.1	成りたいものになる				1	2.4
			(目標に向かって)頑張る				1	2.4
			語学を学ぶ				1	2.4
			親への恩返し				1	2.4
小計(n=33人)							55	166.7
N.A.							8	ー
総計(n=41人)							ー	ー

まず、生徒の将来生活志向は、「生活イメージ」と「仕事イメージ」、「その他」から構成されていると考えられる。「生活イメージ」の比重は大きく（30 件、90.9%）、「仕事イメージ」と「その他」は少ない（5 人と 3 人）。キャリア教育を通して、職業への意識は高かったものの、それが将来生活の軸にくる例は少ない。そして、内容も「安定収入」を求めるものを中心とする。

次に、生徒の「生活イメージ」の詳細を検討する。「生活イメージ」は、「満たされた生活」、「自由が利く生活」、「波瀾のない生活」とまとめることができるようなラベルに整理されるそれ以外では、「家庭をもつ」、「自立」、「周囲を助ける」、「健康的」が加わる。この中で度数が大きなのは、「満たされた生活」（13 人、39.4%）と「自由が利く生活」（12 人、36.4%）である。それぞれのラベルの要素が図表の通りである。

最後に、キャリア教育の構想（「夢を実現する」を起点とした学習モチベーション喚起）

の影響力を確認する。それが、言葉として生徒にそのまま表現されたものは、「その他」の「成りたいものになる」と「(目標に向かって) 頑張る」だけである。

総括しよう。生徒の将来生活志向は、「満たされた生活」「波瀾のない生活」と呼べるような生活の安定を求める生活志向と生徒自身の「自由が利く生活」を求める生活志向の２つを核とする。このような意味で、極めて「野心」に乏しい。後退期に入った日本社会において、身近な範囲の自由と安全に配慮した将来生活、すなわちある種の「防衛的」なものとなっていると考えられる。

しかしながら、事後的ではあるが、この「将来の生活希望」という聞き方に問題があった可能性もある。生徒の考える生活には、働くこと含まれていない可能性もあるからである。すなわち、労働と生活を区別し、質問がこの後者に関して尋ねたものあると判断して回答結果が、「生活イメージ」に集中した原因であるとも考えられるからだ。このような意味で、断定は禁物かもしれない

第２章　調査結果の考察

これ以降は、調査票の項目に沿った分析から離れて、報告書の課題に対応した横断的な考察を行う。

ここで分析の軸とするのが、生徒の地域アイデンティティである。これを縦軸として、「大樹学」やキャリア教育と生徒の各種の将来構想との関係の有無を検討する。

まず、地域アイデンティティの構造を明らかにする。ここまでは、大樹町の「良いところ」と「良くないところ」を、自由記述からラベルを抽出して、対応させることしか行っていない。さらに、ラベル間の関係を検討することで、地域アイデンティティの構造を考察する。考察は、個々のラベルへの「該当」／「非該当」をラベル同士のクロス表を作成する方法で行う。しかしながら、生徒数はそれほど多くなく、作成された各ラベルで度数が低い場合も多い。そのため、主要なラベル間のクロス表の作成と関係の確認に限定される。

第１節　生徒の地域アイデンティティの構造

（１）大樹町の「良いところ」（ラベル）の関係

大樹町の「良いところ」の主要なラベルは、「豊かな自然がある」（24 件）、「穏やかな地域社会」（20 件）、「誇れる町」（15 件）であった。

この３者の関係をクロス表の作成し、確認してみた。確率検定は、「2×2」（2 行×2 列）のクロス表において、度数が小さな場合に使用することができる Fisher の直接法(両側) で行った。なんといっても度数が小さい。そのため、この有為確率の数字にクロス表の読み取りの併用することで解釈を行う。判断に曖昧な点が含まれることにご容赦を請う次第である。

図表３６－１　「豊かな自然がある」×「穏やかな地域社会」

			大樹町の良いところ（穏やかな地域社会）		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（豊かな自然がある）	該当	度数(件)	10	14	24
		内訳(%)	41.7	58.3	100.0
	非該当	度数(件)	10	6	16
		内訳(%)	62.5	37.5	100.0
合計		度数(件)	20	20	40
		内訳(%)	50.0	50.0	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.333

「豊かな自然がある」と「穏やかな地域社会」は少し関係がありそうだ（図表３６－１）。「豊かな自然がある」を選択した場合には、「穏やかな地域社会」は選択しない傾向にあると考えられる。すなわち、両者が大樹町を評価するベクトルは異なっている。

図表３６－２　「豊かな自然がある」×「誇れる町」

			大樹町の良いところ（誇れる町）		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（豊かな自然がある）	該当	度数(件)	8	16	24
		内訳(%)	33.3	66.7	100.0
	非該当	度数(件)	7	9	16
		内訳(%)	43.8	56.3	100.0
合計		度数(件)	15	25	40
		内訳(%)	37.5	62.5	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.527

「豊かな自然がある」と「誇れる町」はほぼ関係がない（図表３６－２）。評価のベクトルの重なりはないと考えられる。

図表３６－３　「穏やかな地域社会」×「誇れる町」

			大樹町の良いところ（誇れる町）		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（穏やかな地域社会）	該当	度数(件)	6	14	20
		内訳(%)	30.0	70.0	100.0
	非該当	度数(件)	9	11	20
		内訳(%)	45.0	55.0	100.0
合計		度数(件)	15	25	40
		内訳(%)	37.5	62.5	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.514

「穏やかな地域社会」と「誇れる町」にもほぼ関係はない（図表３６－３）。評価のベクトルの重なりはないと考えられる。

すなわち、大樹町の「良いところ」を構成するラベルは、それぞれが関係性のない３つの正の地域アイデンティティと考えられそうだ（「良いところ」なので正と考える）。３つのラベルの度数は大きいが、関係は弱い。かろうじて、「穏やかな地域社会」と「豊かな自然がある」の地域アイデンティティに、ベクトルの違いが感じられる。

ところで、度数は小さいが、強く関係している２つのラベルがある。「町の努力」と「近隣町村より良い」である（次頁の図表３６－４）。この両者は、同じ方向の評価であると考えられる。前述したように、度数は小さい。雰囲気としての評価というより、自分の意見としての評価ではないだろうか。だからこそ、関連性が強く表れる。共に（自然にあるもの、与えられたものではなく）努力して創り出している点に根拠をもつと考えられる。

ところで、思い出しておきたいのが、「近隣町村より良い」を構成していた要素は、「最小限の店がある」であったことだ。先の理解（努力して創り出している）の延長線上で考えると、「最小限の店」があるという意味は、店を維持している（廃業しないでいる）という文脈で理解していると考えることができる。一般的に「町の努力」という言葉を使用する場合、

行政の努力を念頭に置きがちであるが、ここを広く考える必要を示唆している。

図表３６－４　「町の努力」×「近隣町村より良い」

			大樹町の良いところ（近隣町村より良い）		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（町の努力）	該当	度数(件)	3	1	4
		内訳(%)	75.0	25.0	100.0
	非該当	度数(件)	1	35	36
		内訳(%)	2.8	97.2	100.0
合計		度数(件)	4	36	40
		内訳(%)	10.0	90.0	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.002

ここでは、紹介に止めておくが、市街において空き店舗を改装してパン屋を開業する例があった。地域振興を進める地域商工会（青年部）の努力もある。この意味では、「誇れる町」と「町の努力」が負の関係であることは論点となる（図表３６－５）。

図表３６－５　「誇れる町」×「町の努力」

			大樹町の良いところ（町の努力）		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（誇れる町）	該当	度数(件)	0	15	15
		内訳(%)	0.0	100.0	100.0
	非該当	度数(件)	4	21	25
		内訳(%)	16.0	84.0	100.0
合計		度数(件)	4	36	40
		内訳(%)	10.0	90.0	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.278

「誇れる町」の要素（図表２０参照）に戻して考えてみたい。「誇れる町」の要素は、「ロケットが有名」、「町がきれい」、「来町者が多い」、「町の雰囲気が明るい」、「独自のもの・特徴がある」であった。「町の努力」は「教育に手厚い」、「町を良くしようとしている」であった。全くの仮説となるが、ここでの「誇り」は自ら（延長線上にあるものも含めて）の努力という点と重ならないのではないかと考えた。その点が「最小限の店がある」との違いではないかと考えた。すのような推論から、ここで「近隣町村より良い」と「町の努力」を、「町の努力」に代表させることができる、意味のはっきりした正の地域アイデンティティと考えたい。

すなわち、大樹町の「良いところ」は、３つの、関係がぼんやりとした、度数の大きい正の地域アイデンティティと、２つの、関係が強い、度数の小さい地域アイデンティティ」の２層で構成されていると考えられる。

（２）大樹町の「良くないところ」（ラベル）の関係

大樹町の「良くないところ」において主要なラベルは、「消費文化へのアクセスが悪い」の23件(60.5%)が中心で、それ以外とはかなり差があった。「設備が不十分」が7件(18.4%)、「衰退する町」が5件（12.2%）になる。

この３者の関係をクロス表の作成し、確認してみる。

図表３７－１　「消費文化へのアクセスが悪い」×「設備が不十分」

			大樹町の良くないところ(設備が不十分)		合計
			該当	非該当	
大樹町の良くないところ(消費文化へのアクセスが悪い)	該当	度数(件)	2	21	23
		内訳(%)	8.7	91.3	100.0
	非該当	度数(件)	5	10	15
		内訳(%)	33.3	66.7	100.0
合計		度数(件)	7	31	38
		内訳(%)	18.4	81.6	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.089

この２者には関係があると考えられる。そして、大樹町の「良くないところ」として「消費文化へのアクセスが悪い」を選択した場合は、「設備が不十分」を選択しない傾向があると考えられる。「設備が不十分」のラベルの元となった要素は、「安全な遊び場が少ない」、「街灯が少ない」、「道が悪い」、「施設がない」であった。この行政の責任に因ると考えられるある種の「不足」は、消費へのアクセスの「不足」とは違うと考えているのだろう。大樹町を問題にする場合の方向性が逆になっている。

図表３７－２　「消費文化へのアクセスが悪い」×「衰退する町」

			大樹町の良くないところ(衰退する町)		合計
			該当	非該当	
大樹町の良くないところ(消費文化へのアクセスが悪い)	該当	度数(件)	0	23	23
		内訳(%)	0.0	100.0	100.0
	非該当	度数(件)	5	10	15
		内訳(%)	33.3	66.7	100.0
合計		度数(件)	5	33	38
		内訳(%)	13.2	86.8	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.006

この２者は強く関係していると考えられる。これも、先の「設備が不十分」同様の、在り方として「良くないところ」を問題にしていると考えられる。「消費文化へのアクセスが悪い」という評価は、「衰退する町」という評価と両立しない。

「衰退する町」のラベルの元となった要素は、「人が少ない・人口減少」、「高齢化」、「空き家・空き地が多い」、「町の衰退」であった。この状況認識はシビアで、生徒が大樹町の「良

くないところ」として、例えば「店がない」と評価するのとは、全く異なることを意味している。「よくないところ」で「消費文化へのアクセスが悪い」を相対評価であると理解したが、「衰退する町」という評価はある意味で絶対評価である。そのために両立しないのではないかと考えた。

それでは、「設備が不十分」と「衰退する町」の「良くないところ」を考える方向性はどうなっているのだろうか。

図表３７－３　「設備が不十分」×「衰退する町」

			大樹町の良くないところ(衰退する町)		合計
			該当	非該当	
大樹町の良くないところ(設備が不十分)	該当	度数(件)	1	6	7
		内訳(%)	14.3	85.7	100.0
	非該当	度数(件)	4	27	31
		内訳(%)	12.9	87.1	100.0
合計		度数(件)	5	33	38
		内訳(%)	13.2	86.8	100.0

Fisher の直接法(両側) p=1.000

検討からは、この２者が全く関わっていないことがわかる。

「設備が不十分」であることは「衰退する町」と関わっていない。このような意味で、町の衰退は、行政の努力と無関係なもの、例えばある種の自然（別の言い方に替えるなら「宿命」）のように理解している可能性があると考える。

すなわち、大樹町の「良くないところ」は、「消費文化へのアクセスが悪い」という負の地域アイデンティティの「軸」をもつ。これとはベクトルの異なる２つの負の地域アイデンティティ「設備が不十分」と「衰退する町」が軸と関係をもって存在していると考えられる。

（３）大樹町の「良いところ」（ラベル）と「良くないところ」（ラベル）の関係

前述したように、大樹町の「良いところ」は２層から構成されていた。主要な３つのラベル（「豊かな自然がある」（24 件）、「穏やかな地域社会」（20 件）、「誇れる町」（15 件））を正の地域アイデンティティがあると考えた。そして主要ではない（度数が小さい）２つのラベル（「近隣町村より良い」と「町の努力」）の正の地域アイデンティティがあった。前者は、ほぼ無関係である。多少評価のベクトルが異なるのは、「豊かな自然がある」と「穏やかな地域社会」である。後者は、強く関係し、両者の評価ベクトルは同じ向きを向いていた。

他方で、大樹町の「良くないところ」は、ひとつのラベル（「消費文化へのアクセスが悪い」（23 件））が軸になる。これが負の地域アイデンティティであると考えられる。これに、ベクトルの異なる２つの負の地域アイデンティティ（「設備が不十分」（7 件）、「衰退する町」（5 件））が関係していた。こちらも、前者と後者で量と質の違う２層から構成されていると考えられる。

「良いところ」と「良くないところ」の関係を考察するために、主要なもの（度数の大きなもの）と、副次的なもの小さなもの（以降でこの両者を併せて考える場合は、「２層」と呼ぶ）の違いに注意して関係を考察してゆこう。

①「良いところ」の主要３ラベルと「良くないところ」の２層の関係

まず、「良いところ」の主要３ラベルと「良くないところ」の軸ラベル（「消費文化へのアクセスが悪い」）との関係を検討した。結果はどれも同じであったので、最も度数の高い「豊かな自然がある」とのクロス表を代表として掲げておく。

図表３８－１　「豊かな自然がある」×「消費文化へのアクセスが悪い」

			大樹町の良くないところ(消費文化へのアクセスが悪い)		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（豊かな自然がある）	該当	度数(件)	14	10	24
		内訳(%)	58.3	41.7	100.0
	非該当	度数(件)	9	5	14
		内訳(%)	64.3	35.7	100.0
合計		度数(件)	23	15	38
		内訳(%)	60.5	39.5	100.0

Fisher の直接法(両側) p=1.000

「豊かな自然がある」という評価は、「消費文化へのアクセスが悪い」という評価とは無関係である。この事実は重要である。そして、私のこれまでの研究も同様の結果であった。すなわち、正の地域アイデンティティとして自然の評価が高くても、それは「消費文化へのアクセスが悪い」という負の地域アイデンティティを強めも、弱めもしない。その意味で、並立するプラスと負の地域アイデンティティである（「自然はあるけど、店がない」）。

他の、「穏やかな地域社会」（20 件）、「誇れる町」（15 件）に替えても同様であった。「消費文化へのアクセスが悪い」を強めも、弱めもしないのである。

次に、「良いところ」の主要３ラベルと「良くないところ」の度数の小さい２つのラベル（ベクトルが異なる）との関係はどうなっているだろうか。「設備が不十分」とのクロス表を作成した（次頁の図表３８－２）。

「豊かな自然がある」の該当／非該当は、「設備が不十分」の該当／非該当に影響を与えない。この「豊かな自然がある」を、「穏やかな地域社会」や「誇れる町」に替えても同様であった。さらに、「良くないところ」を「衰退する町」に替えても同様であった。

すなわち、「良いところ」の主要な３ラベルは、「良くないところ」ラベル全体に影響を与えない。ここから、「良いところ」の主要３ラベルの内容（「豊かな自然」、「穏やかな地域社会」、「誇れる町」）をこのままの形で強化しても、「良くないところ」の改善にはつながらないことが示唆される。

図表３８－２　「豊かな自然がある」×「設備が不十分」

			大樹町の良くないところ(設備が不十分)		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（豊かな自然）	該当	度数(人)	5	19	24
		内訳(%)	20.8	79.2	100.0
	非該当	度数(人)	2	12	14
		内訳(%)	14.3	85.7	100.0
合計		度数(人)	7	31	38
		内訳(%)	18.4	81.6	100.0

Fisher の直接法(両側) p=1.000

②「良いところ」の度数の小さい２ラベルと「良くないところ」の２層の関係

「良いところ」の度数の小さい２ラベルは、「近隣町村より良い」と「町の努力」であった。これと「良くないところ」の軸ラベル（「消費文化へのアクセスが悪い」）との関係はどうなっているのだろうか（図表３８－３）。

図表３８－３　「近隣町村より良い」×「消費文化へのアクセスが悪い」

			大樹町の良くないところ(消費文化へのアクセスが悪い)		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（近隣町村より良い）	該当	度数(人)	2	2	4
		内訳(%)	50.0	50.0	100.0
	非該当	度数(人)	21	13	34
		内訳(%)	61.8	38.2	100.0
合計		度数(人)	23	15	38
		内訳(%)	60.5	39.5	100.0

Fisher の直接法(両側) p=1.000

「近隣町村より良い」の該当／非該当は、「消費文化へのアクセスが悪い」の該当／非該当に影響を与えない。「近隣町村より良い」を「町の努力」に替えても同様であった。

そして最後に残ったのが、「良いところ」の度数の小さい２ラベル（「近隣町村より良い」と「町の努力」）と「良くないところ」の度数の小さい２ラベル（「設備が不十分」と「衰退する町」）との関係である。興味深いものとなった。しかし共に度数が小さいため、統計的な結果として断定できるものというより仮説的なものである。しかも、統計は因果を説明できるわけではない。その意味も含めて仮説である。

「良いところ」２ラベルと「良くないところ」２ラベルから４つのクロス表ができる。このなかで、Fisher の直接法（両側）による有為確率で大きなものは、「町の努力」と「衰退する町」の関係であった。

図表３８－４　「町の努力」×「衰退する町」

			大樹町の良くないところ(衰退する町)		合計
			該当	非該当	
大樹町の良いところ（町の努力）	該当	度数(人)	2	2	4
		内訳(%)	50.0	50.0	100.0
	非該当	度数(人)	3	31	34
		内訳(%)	8.8	91.2	100.0
合計		度数(人)	5	33	38
		内訳(%)	13.2	86.8	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.076

「町の努力」の該当／非該当は、「衰退する町」の該当／非該当に関わっている。そして、「町の努力」が該当すると、「衰退する町」も該当する。因果関係は不明であるが、「衰退する町」に抗うという構図で「町の努力」の評価が高いのではないか。

「町の努力」コードの要素は、「教育に手厚い」、「町を良くしようとしている」であった。他方で「衰退する町」は、「人口が少ない・人口減少」、「高齢化」、「空き家・空き地が多い」、「町の衰退」であった。要素で確認しても、前者の努力の評価と後者の危機感が対比されていると考えることはできるように思う（危機感をもっているから努力を評価する）。

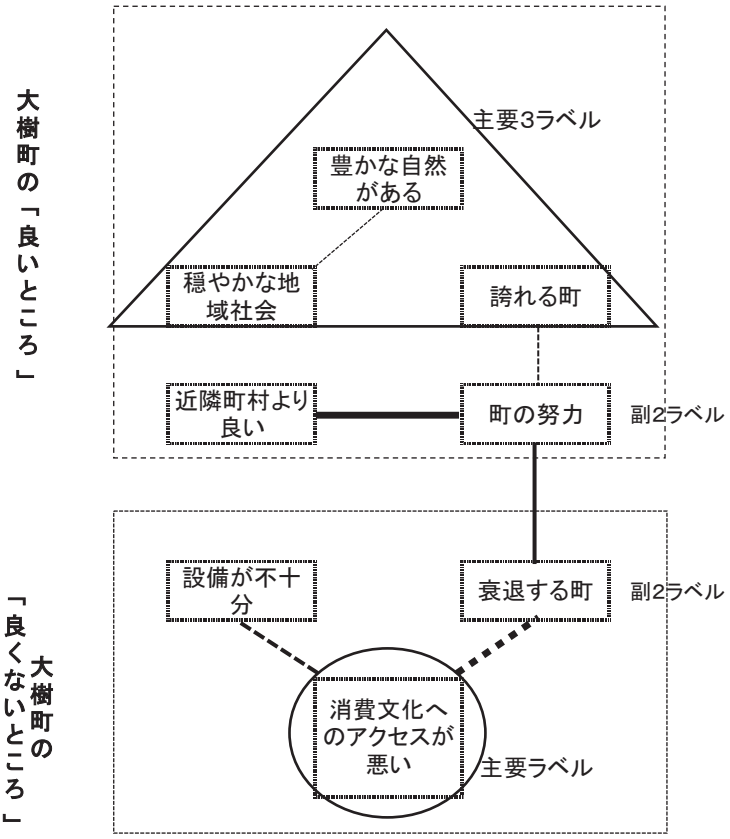
しかしながら、「町の努力」と「設備が不十分」のクロス表を作成し検討したが、Fisher の直接法による有為確率は p=1.000 であり、関係があるとは言えなかった。これは「設備が不十分」の要素は、「安全な遊び場が少ない」、「街灯が少ない」、「道が悪い」、「施設がない」であり、これを町（行政を中心と考えて）の努力の結果とは考えていないことを表している。その意味で、「町の努力」は、「教育に手厚い」、「町を良くしようとしている」というものであって、設備の充実にまで広げて理解していない（気がつかない）のかもしれない。しかしこれも、推理に止まる。

（４）小括――地域アイデンティティの模式図

これらの「良いところ」と「良くないところ」のラベルの関係を検討した結果として、大樹町中学生の地域アイデンティティの模式図を描いてみよう。次頁の図表３９である。

模式図の表記方法を説明する。左側に、大樹町の「良いところ」と「良くないところ」のエリア区別の表示は点線でした。そして、「良いところ」のエリア内部に、主要３ラベル（△の実線）と副２ラベルを配置した。「良くないところ」のエリアには主要１ラベル（○の実線）と副２ラベルを配置した。図表下にはラベル間の関係の表記（線）の根拠とした有為確率を書いておいた。数値から線の太／細を、クロス表の検討から関係の正負を実線／点線で表記した。

図表３９　大樹町中学生の地域アイデンティティ（模式図）



※　有為確率に応じて線の太さを、関係の正／負を実線／点線で表記した。

【関係があるラベルと対応する有為確率】
「豊かな自然がある」×「穏やかな地域社会」:Fisher の直接法(両側) p=.333
「町の努力」×「誇れる町」:Fisher の直接法(両側) p=.278
「町の努力」×「近隣町村より良い」:Fisher の直接法(両側) p=.002
「町の努力」×「衰退する町」:Fisher の直接法(両側) p=.076
「消費文化へのアクセスが悪い」×「衰退する町」:Fisher の直接法(両側) p=.006
「消費文化へのアクセスが悪い」×「設備が不十分」:Fisher の直接法(両側) p=.089

生徒の正の地域アイデンティティは、はっきりとしていたが、各々の関係は不明確であった。関係が明確であることは、意味的に一貫したものであることを意味する。その点から言って、一貫していたのは副次的で少数の生徒がもっていた。

また、負の地域アイデンティティは絞り込まれ、主副の関係も明確であった。「消費文化へのアクセスが悪い」（軸）と、副次的な２つのラベルの関係は前述したように示唆的である。

そして、正の地域アイデンティティと負の地域アイデンティティは、「町の努力」と「衰退する町」との間で関係があった。前者の努力（言い換えるなら、取り組みがあること）と後者の危機意識の組み合わせである。ここが一貫している点が明らかになったことが重要である。すなわち、「町の努力」は「衰退する町」を経由し、「消費文化へのアクセスが悪い」

という負の地域アイデンティティの軸に関係するからである。

これがどのような実践を示唆するかは、第３章で試論をだしてみたい。

以降では、この生徒の地域アイデンティティの構造を柱にして、他の問題との関係を整理していく。

第２節　大樹町評価（３択方式）と地域アイデンティティの関係

図表１７において、生徒の大樹町評価を紹介しておいた。３択で聞いたものである。「好き」と「半々」が拮抗していた。この好悪は、地域アイデンティティとどのように関わっていたのだろうか。クロス表を作成する形で確認する。ただし、「嫌い」は１件で有為確率を計算する関係で除外する。「好き」と「半々」の違いは何に基づくのかを確認することに限定したい。ただし、「嫌い」の該当／非該当は明記する。

まず、「良いところ」である。ここで有為確率の検討から関係がある言えたのは、「穏やかな地域社会」だけであった。「嫌い」の評価は、非該当であった。

図表４０－１　大樹町評価（３択）と「良いところ」（「穏やかな地域社会」）

			大樹町の「良いところ」（穏やかな地域社会）		合計
			該当	非該当	
大樹町の評価	好き	度数(人)	13	5	18
		内訳(%)	72.2	27.8	100.0
	半々	度数(人)	7	14	21
		内訳(%)	33.3	66.7	100.0
合計		度数(人)	20	19	39
		内訳(%)	51.3	48.7	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.0025

「穏やかな地域社会」は、「好き」と「半々」のどちらを選択するかに、強く関係していると考えられる。このことの意味は重要である。生徒が「良いところ」として挙げた内容であっても、「好き」という感情も含んだ判断につながるのは、「穏やかな地域社会」だけである。これに次ぐのは「誇れる町」であった（Fisher の直接法(両側) p=.0203）。

他方で「豊かな自然がある」は、言わば当たり前である。より説明を加えるなら「消費文化へのアクセスが悪い」ことの半面（裏面）なのだから。それを「好き」と感じる訳ではない。自分たちの生活と結び付く「生活価値」が、自町への感情（「好き」）につながるのだ。

次に、「良くないところ」である。「嫌い」の評価は、「該当」であった。

図表４０－２　大樹町評価（３択）と「良くないところ」(「消費文化へのアクセスが悪い」)

			大樹町の「良くないところ」(消費文化へのアクセスが悪い)		合計
			該当	非該当	
大樹町の評価	好き	度数(人)	7	9	16
		内訳(%)	43.8	56.3	100.0
	半々	度数(人)	15	6	21
		内訳(%)	71.4	28.6	100.0
合計		度数(人)	22	15	37
		内訳(%)	59.5	40.5	100.0

Fisher の直接法(両側) p=.0107

この関係は強いとまでは言えない。しかし、度数は少ないが影響はあると思う。当然、「半々」の評価の方が「消費文化へのアクセスが悪い」と考えている生徒が多いという結果になった。角度を替えて言うなら、「好き」であっても、「消費文化へのアクセスが悪い」は浸透しているとも言える。

これに次ぐのは、「設備が不十分」であった（Fisher の直接法(両側) p=.437)。

すなわち、「消費文化へのアクセス」の良否が、「好き」と「半々」を分けがちなのである。

ここまで見てきたように、生徒の大樹町評価（「好き」「半々」）の判断は、「生活価値」（「穏やかな地域社会」と、消費文化へのアクセスの良否（「消費文化へのアクセスが悪い」）に強く牽引されている。そして、この２つは一貫した論理の元にはなく、並列している。

第３節　将来の居住地志向と地域アイデンティティ

まず、生徒の将来志向を考える上で、居住地志向が重要な位置にあることを強調しておきたい。

これは、北海道以外の都市圏（北海道では札幌市近郊は例外）に居住する人には気がつかない点である。北海道の教育機関が地理的に不均衡に分布している点は、強調しておかなければならない。政府が教育における平等を重要なテーマとして考えたのは、1980 年代までだと評価する。一種の「開発国家」であった日本にとって、人（人材）が資源であり、教育はそのための重要な手段であった。それが転換した。それでも新自由主義的な教育改革が強力に推進されるまでは、顕著なものではなかったと考えられる。その後の変化をトピック的に掲げるだけで止めておくが、教育面における地域格差は目に触れるようになった。

1990 年代中盤以降は、「バブル崩壊」以降の経済停滞によって、経済的「中流」層の底が抜け始めた。保護者の経済的な安定性が損なわれだした。

2000 年代初頭の「小泉改革」は、義務教育の国庫負担金の減額を行い、地方の教育「体力」を奪っていった。行政改革に因る地方経済（建築・土木）の疲弊も大きかった。そして教育について言えば、学校における「ゆとり教育」の実施と規制緩和（追加教育を得るため

に教育市場を利用）である。「ゆとり教育」は生徒の学習のモチベーションを分解した。経済階層によって、教育市場からの追加的な学力獲得能力は異なる。この両者が相まって生徒の学力達成は、保護者の経済力の影響をより強く受けるようになった。

そして、北海道において中学生の進路を議論する上で、地域格差に注目するのは最も大切なこととなった。

生徒数の激減によって、公立高校の再編（統廃合）が進行した。北海道で言えば、中学校卒業者数は 1990 年のおよそ 9 万人から、2019 年 3 月時点で 4 万 4 千人となった。本格的に高校の統廃合が着手されたのは、2006 年 8 月の「新たな高校教育に関する指針」（北海道教育委員会）の策定以降になる。2006 年の全日制高校数は 223 校であった。2020 年のそれは 184 校にすぎない。

大都市であれば、高校ごとの定員（間口）限で対応することも可能である。札幌市近郊のように学区を 1 区に統合してしまえば、多少の高校が統廃合されたとしても、進学の選択肢という点で、それほど大きな意味はない。しかし、地方において 3 校が 2 校になる場合や、2 校が 1 校になる場合、北海道では珍しくない。さらに、高校がなくなる場合は大問題である。このような意味で、公立高校の統廃合は地方の中学校卒業者の進路の選択肢を大きく制約している。

さらに前述したように、市場における追加的な教育の入手可能性は地域的に大きく異なる。町村よりは市が、小規模の市よりもより大規模の市が、例え中規模の市でも進学塾の少ないところもあるだろう。そのように保護者が思考を進めるなら、子弟の教育だけを考えることができた場合、札幌市近郊に転居することを選択する場合もまれではなくなる。

そして、町村で高校が 1 校もないところがあるのは「当然」として、市でも高校が 1 校もない場合や、1 校しかない場合は増えた。子弟の進路を保護者が考える時、高校の選択肢がない場合や、市町村を越境して進学する場合（「通学区」が無意味化している場合もある）には、進学を機に転居することも選択肢に入ることになった。ご存じのように、高校はそれ以降の進路を制約する。保護者にとって子弟の進学は、家族戦略上も非常に重要な問題のひとつとなった。

この節では、進路そのものでもある将来の居住地志向が地域アイデンティティとどのように関わっているのか、その中でも何が決め手となっているのかを検討する。

（1）中学校卒業後の進路と将来の居住地志向

まず、上述した高校進学が将来の居住地志向に組み込まれる、あるいはこの両者が一体であることを示す。

図表４１は、表側に中学校卒業後の進学先を、表頭に将来の居住地志向をおく形で作成したクロス表である。

図表４１　「中学校卒業後の進路」×「将来の居住地志向」

			将来の居住地志向					合計
			ずっと大樹町に残る	いったん大樹町は出るが戻ってくる	大樹町からは出るが十勝には残る	十勝を出て戻ってこない	決めていない	
中学校卒業後の進路希望	町内の高校進学	度数(人)	5	1	3	1	0	10
		内訳(%)	50.0	10.0	30.0	10.0	0.0	100.0
	帯広市の高校進学	度数(人)	1	4	11	3	0	19
		内訳(%)	5.3	21.1	57.9	15.8	0.0	100.0
	町内、帯広市以外の高校進学	度数(人)	0	1	0	1	0	2
		内訳(%)	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	100.0
	十勝圏以外の高校進学	度数(人)	0	2	0	2	1	5
		内訳(%)	0.0	40.0	0.0	40.0	20.0	100.0
	高専進学	度数(人)	0	0	0	1	0	1
		内訳(%)	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0
合計		度数(人)	6	8	14	8	1	37
		内訳(%)	16.2	21.6	37.8	21.6	2.7	100.0

「町内の高校（大樹高校）進学を希望する生徒」は、この両質問に回答した生徒（37 人）のうち 10 人にすぎない（生徒全体では 12 人で 3 割を切る）[24]。そしてこの生徒は、「ずっと大樹町に残る」を中心に、「大樹町からは出るが十勝には残る」という範囲で、将来の生活圏を構想している。

[24] 本報告書は、地方の高校がどのように存続するのかについて検討するものではない。しかし、最低限のことは述べておきたい。

北海道の地方の高校の存続の問題は、島根県のように他県から進学者を獲得する方法もあるが、究極すれば同じ地域（この場合は大樹町内）の中学校からどれだけの生徒が高校へ進学するかにかかっている。北海道教育委員会が高校の存続を認める条件のひとつに、地元からの進学率が高い高校（同一市町村から半数が進学する）という基準を示したこともこれに関わっている（2006 年 8 月「新たな高校教育に関する指針」（北海道教育委員会）以降も、ひとつの目安として機能していると思われる）。問題なのは、北海道の地方における進路事情を念頭におくなら、地元の高校への進学が「進路を狭める」可能性が高いと、生徒にとって（保護者にも）事実であると思われていることである。逆の言い方をすると、現在注目されつつある「高校魅力化」政策とその方法論（「地域資源」を教育に生かすこと）は重要であるが、高校存続の必要条件ではあるが十分条件ではない。十分条件は、生徒の進路の「可能性を狭めない」学力形成」能力（の獲得）である。そして慌てて付け加えるが、現在の地域格差の拡大、また新しい学習指導要領や高校普通科改革の目指す方向性は、旧来の受験学力形成という点で地方高校が構造的に不利である現実を覆す可能性を与えていると考えている。もちろん、自動的に実現するわけではない。ここでは指摘に止めておくが、受験を手段とした競争的な学力形成は、その後の大学での学びの「空洞化」につながり、大学における学習を無効化することはよく知られた事実であろう。なによりも「自分事」にひきつけた「学び」（「探究」）が、学習のモチベーションを呼び覚ます。中等教育段階においても、この「自分事」にひきつけた「学び」の方法論の開発が問われている。「学び」を「自分事」に引きつける条件を考えた時、教育サービスの消費者という立場に止まれる都市とそもそもそれが望めない地方の、後者の潜在性をどのように開花するのかが論点である。これは「ポスト成長期」の教育のフロンティアである。キャッチフレーズ的に名付けることが許されるなら、「地域参加型教育実践」である。

「帯広市の高校進学を希望する生徒」の場合、「ずっと大樹町に残る」ははっきりと少なくなる（1 人）。そして、「大樹町からは出るが十勝には残る」が 6 割に近づく。それでも、「十勝を出て戻ってこない」という生徒は 3 人と多くない。

「町内、帯広市以外の十勝圏の高校進学を希望する生徒」は、そもそも少ない（2 人）。「いったん大樹町は出るが戻ってくる」と「十勝を出て戻ってこない」が半々である。

そして、「十勝圏以外の高校進学を希望する生徒」は 5 人（37 人のうちの 13.5%）とそれほど多くない。「いったん大樹町は出るが戻ってくる」と「十勝を出て戻ってこない」が半々（2 人ずつ）となっている。

全体を外観する。「ずっと大樹町に残る」が 6 人（16.2%）、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」が 8 人（21.6%）、「大樹町からは出るが十勝には残る」が 14 人（37.8%）で最多で、「十勝を出て戻ってこない」が 8 人（21.6%）である。これを、同心円を思い描いて、理解してみよう。「ずっと大樹町に残る」を中心にあると仮定して、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」を加えると 14 人である。この外側に、「大樹町からは出るが十勝には残る」の 14 人がいる。そして、さらに外側に「十勝を出て戻ってこない」が 8 人いると考えられる。すなわち、生徒の将来の生活圏は十勝圏で 4 分の 3 が完結する。このように考えたときの高校進学である。そして地元の高校の存続を考えたとき、希望者の量が問題となるのである。

（2）中学校卒業後と高校卒業後の進路の関係

前述した中学校卒業後の進路（進学先高校の所在地）と高校卒業後の進路の関係を検討する。

図表４２　「中学校卒業後の進路志望」×「高卒後の進路」

			高卒後の進路		合計
			進学	就職	
中学校卒業後の進路希望	町内の高校進学	度数(人)	2	4	6
		内訳(%)	33.3	66.7	100.0
	帯広市の高校進学	度数(人)	10	2	12
		内訳(%)	83.3	16.7	100.0
	町内、帯広市以外の高校進学	度数(人)	1	1	2
		内訳(%)	50.0	50.0	100.0
	十勝圏以外の高校進学	度数(人)	4	1	5
		内訳(%)	80.0	20.0	100.0
	高専進学	度数(人)	1	0	1
		内訳(%)	100.0	0.0	100.0
合計		度数(人)	18	8	26
		内訳(%)	69.2	30.8	100.0

調査時点では高校卒業後の「進路未定」の生徒が多かった（図表３２参照）。そのため 26 人の数字となっている。また、進学希望者は 18 人のうち、大学進学希望する生徒が 13 人

で専門学校進学希望する生徒が５人であった。

「町内の高校進学」の場合、就職が中心となる（4 人、66.7%）。「帯広市の高校進学」の場合、進学が中心になる（10 人、83.3%）。「町内、帯広市以外の高校進学」の場合は、進学と就職が半々である。そして、「十勝圏以外の高校進学」の場合は、進学が 4 人（80.0%）で多い。すなわち、帯広市内の高校進学で高校卒業以降の進学を展望しうるのである。

参考までに、中学校卒業後の進路希望と職業の関係を見ておきたい。図表４３である。

図表４３　「中学校卒業後の進路希望」×「職業希望」

			希望職業(管理的職業)	希望職業(専門的･技術的職業)	希望職業(事務)	希望職業(サービス職業)	希望職業保安職業)	希望職業(農林漁業)	希望職業(生産工程)	希望職業(公務)
中学校卒業後の進路希望	町内の高校進学(n＝8人)	度数(件)	0	2	1	2	0	1	2	0
		内訳(%)	0.0	25.0	12.5	25.0	0.0	12.5	25.0	0.0
	帯広市の高校進学(n＝16人)	度数(件)	0	9	1	2	1	0	3	2
		内訳(%)	0.0	56.3	6.3	12.5	6.3	0.0	18.8	12.5
	町内、帯広市以外の高校進学(n＝2人)	度数(件)	0	1	0	1	0	0	0	0
		内訳(%)	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	十勝圏以外の高校進学(n＝5人)	度数(件)	0	2	0	0	0	2	0	0
		内訳(%)	0.0	40.0	0.0	0.0	0.0	40.0	0.0	0.0
	高専進学(n＝1人)	度数(件)	1	1	0	0	0	0	0	0
		内訳(%)	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計		度数(件)	1	15	2	5	1	3	5	2
		内訳(%)	3.1	46.9	6.3	15.6	3.1	9.4	15.6	6.3

※　希望職業(未定)と希望職業(なし)は割愛した。

「町内の高校進学」の場合、「専門的・技術的職業従事者」(「従事者」は省略。以下同様)、「サービス職業」、「生産工程」が 2 人ずつとなっている。

「帯広市の高校進学」の場合は、「専門的・技術的職業」が過半を超える。そして、「生産工程」が続く。「農林漁業」が 3 人、「事務」と「公務」が 2 人である。以下は省略する。

「町内、帯広市以外の高校進学」の場合は、「専門的・技術的職業」と「サービス職業」が 1 人ずつである。

「十勝圏以外の高校進学」の場合は、「専門的・技術的職業」と「農林漁業」に 2 人ずつとなっている。

「高専進学」の 1 人は、専門技術を身につけて起業するという希望であったため、２つにカウントした。

「専門的・技術的職業」を希望する場合が多いということは前述した通りであるが、中学校卒業後の進路希望の時点で、その違いによって決定的な差がないことを指摘できる。この点が、重要である。

また、職業の分析でも書いたことであるが、「専門的・技術的職業」分類は広い概念であり、ここには「保育士」が分類されることが大きく関わっている。そして帯広市には、酪農

（畜産・獣医師）関連単科大学しか存在しないが、市周辺（音更町）には、短期大学がある。ここでは保育士や幼稚園教諭の免許が取得できる。このことが、地元の高校に進学しても大学進学という進路は閉じておらず、「専門的・技術的職業」を十勝圏で展望できる根拠となっている。

興味深いのは、「十勝圏以外の高校進学」希望の将来の職業が「農林漁業」がとなっていることである。

全体として、十勝圏で将来の職業志向を充分に包摂可能となっていることがわかる。すなわち、職業志向が原因となって、将来の居住地志向を制約する余地はあまりないことがわかる。

この点は、筆者のこれまでのオホーツク総合振興局管内や上川総合振興局管内の中学校の生徒の進路志向と大きく異なるところである。キャリア教育の影響力はあるにしても、生徒の職業志向が、十勝圏の高校や大学によって充分包摂可能である点が、特に帯広市が十勝圏の地理的な中心にあり、町村が同心円上に存在していること（通学上の困難を免れる度合いの高い良好なロケーション）と少ないが、大学・短大があることの特徴が現れた形となっている。

（３）ジェンダーの影響

重要な論点ではあるが、ジェンダーは将来の居住地志向に影響があるのかということだけ確認しておく。

図表４４　「性別」×「将来の居住地志向」

		将来の居住地志向					合計
		ずっと大樹町に残る	いったん大樹町は出るが戻ってくる	大樹町からは出るが十勝には残る	十勝を出て戻ってこない	決めていない	
男子	度数(人)	2	3	6	3	1	15
	内訳(%)	13.3	20.0	40.0	20.0	6.7	100.0
女子	度数(人)	4	5	8	5	0	22
	内訳(%)	18.2	22.7	36.4	22.7	0.0	100.0
合計	度数(人)	6	8	14	8	1	37
	内訳(%)	16.2	21.6	37.8	21.6	2.7	100.0

一目瞭然であるが、ジェンダーの影響はない。あったとしても非常に小さいと考えられる。この原因については不明であるが、前述したように十勝圏の高校や大学によって生徒の職業志向の包摂可能性が高いこと（十勝圏という形でコンパクトになっていること）が大きく影響していると思われる。そして、その背景には十勝圏内に止まることで将来的な生活の展

望が描けることがある[25]。

（４）将来の居住地志向と地域アイデンティティ

ここまでの要約は次のようなものである。十勝圏の高校や大学によって生徒の職業志向の包摂可能性が高いため、生徒の将来の居住地志向は職業志向によって一義的に決定されない。しかしながら、十勝圏の範囲で大樹町との関係という点で、生徒の将来の居住地志向には大きな影響を及ぼしている。すなわち帯広市に引きつけられ続ける。このことの説明の一端として、地域アイデンティティという視角から考察を行う。

図表４５　「消費文化へのアクセスが悪い」×「将来の居住地志向」

			将来の居住地志向					合計
			ずっと大樹町に残る	いったん大樹町は出るが戻ってくる	大樹町からは出るが十勝には残る	十勝を出て戻ってこない	決めていない	
大樹町の良くないところL2(消費文化へのアクセスが悪い)	該当	度数(人)	1	5	6	7	1	20
		内訳(%)	5.0	25.0	30.0	35.0	5.0	100.0
	非該当	度数(人)	3	3	8	0	0	14
		内訳(%)	21.4	21.4	57.1	0.0	0.0	100.0
合計		度数(人)	4	8	14	7	1	34
		内訳(%)	11.8	23.5	41.2	20.6	2.9	100.0

まず、確認しておく。大樹町評価（三択）の「好き」「半々」に影響を与えたのは、「良いところ」では「穏やかな地域社会」であった。他方で、「良くないところ」は「消費文化へのアクセスが悪い」であった。そして、後者が生徒の地域アイデンティティに強く影響していた（図表３９（模式図）参照）。

「消費文化へのアクセスが悪い」と「将来の居住地志向」のクロス表を作成した（図表４５）。一見するだけで、その影響力の大きさがわかる。大樹町について「消費文化へのアクセスが悪い」という負の地域アイデンティティをもっている場合、将来の居住地志向は大樹町を遠ざける方向に影響している。

「ずっと大樹町に残る」と「いったん大樹町は出るが戻ってくる」を合わせて考えると、「消費文化へのアクセスが悪い」としてアイデンティティをもっている場合は 30.0%であるのに比して、持っていない場合は 42.8%になる。まだ極端な差とは言えない。

「大樹町からは出るが十勝には残る」では前者が 30.0%であるのに比べて、持っていない場合は 57.1%になる。さらに「十勝を出て戻ってこない」では前者が 35.0%であるのに比べ

[25] 筆者が上川総合振興局管内のある中学校で行った生徒調査の場合、「ずっと○○町に残る」が 6.3%、「いったん○○町は出るが戻ってくる」が 31.3%、「○○町を出て戻ってこない」が 46.9%、「未定・N.A.」が 15.6%であった。歴然とした違いがある。上川総合振興局管内の場合、南北に細長く、「十勝圏」に該当するような地域的まとまりを進路の前提にできない。

て、後者が 0%になる。

重要だと思うのは、この「消費文化へのアクセスが悪い」は大樹町の負の地域アイデンティティであることを超えて、すなわち十勝圏に拡張された形で適用されるように見受けられることである。図表では、「十勝を出て戻ってこない」に影響を与えている。個別の地域アイデンティティというよりも、地方の生徒の将来の居住地志向（生活圏）の構想に影響を与える、言わば「力」であると考えられる。

図表４６　「穏やかな地域社会」×「将来の居住地志向」

			将来の居住地志向					合計
			ずっと大樹町に残る	いったん大樹町は出るが戻ってくる	大樹町からは出るが十勝には残る	十勝を出て戻ってこない	決めていない	
大樹町の良いところ L3(穏やかな地域社会)	該当	度数(人)	3	5	5	4	1	18
		内訳(%)	16.7	27.8	27.8	22.2	5.6	100.0
	非該当	度数(人)	2	3	9	4	0	18
		内訳(%)	11.1	16.7	50.0	22.2	0.0	100.0
合計		度数(人)	5	8	14	8	1	36
		内訳(%)	13.9	22.2	38.9	22.2	2.8	100.0

大樹町の「良いところ」で大樹町の評価に関わっていた「穏やかな地域社会」についても同様に作表して見た。

一見してわかるように、「十勝を出て戻ってこない」に影響していないことがわかる。度合いは小さいが、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」に影響していると思う（「ずっと大樹町に残る」にも少し）。すなわち、十勝圏での大樹町（自町）の選択に限定した影響をもっているのではないかと考えられる。

大樹町の中学生は十勝圏の特性によって、職業志向を媒介にして、他地域へ移動しなければならない圧力をそれほど受けていなかった。しかし、消費文化のアクセスの良否（地域格差）は負の地域アイデンティティをもたらし、それが「将来の居住地志向」に広範な影響を及ぼしていると考えられる。

第４節　「大樹学」（「ふるさと学習」）・キャリア教育と将来志向

「大樹学」（「ふるさと学習」）とキャリア教育が、生徒の進路や将来志向にどのような影響を与えているのかについて確認する。

（１）進路志向と「大樹学」・キャリア教育の関係

「大樹学」で「参考になったこと」と進路の関係について、クロス表を作成して確かめることにする。中学校卒業後の進路との関係が図表４７－１、高校卒業後の進路との関係が図

表４７－２である。

図表４７－１　「進路」（中学校卒業後の進路）×「大樹学」で参考になったこと

		「大樹学」で参考になったこと			合計
		職業体験	ふるさと学習	その他	
町内の高校進学	度数(人)	9	1	1	11
	内訳(%)	81.8	9.1	9.1	100.0
帯広市の高校進学	度数(人)	16	4	0	20
	内訳(%)	80.0	20.0	0.0	100.0
町内、帯広市以外の高校進学	度数(人)	2	1	0	3
	内訳(%)	66.7	33.3	0.0	100.0
十勝圏以外の高校進学	度数(人)	2	2	1	5
	内訳(%)	40.0	40.0	20.0	100.0
高専進学	度数(人)	0	1	0	1
	内訳(%)	0.0	100.0	0.0	100.0
合計	度数(人)	29	9	2	40
	内訳(%)	72.5	22.5	5.0	100.0

全体として「職業体験」の割合が７割強、「ふるさと学習」が２割強であった。中学校卒業後の進路で区別してみる。事例数の少なさがあるので、傾向があると断定はできない。しかし、「町内の高校」と「帯広市の高校進学」と通学可能な高校に進学する場合には、相対的に「職業体験」の割合が高く、そうではない場合（「町内、帯広市以外の高校進学」、「十勝圏以外の高校進学」、「高専進学」）には相対的に割合が低くなる。「ふるさと学習」はその逆になる。町内の「職業体験」は、十勝圏（特に町内）の高校に進学を希望する場合に「参考になったこと」としてあげられる。

図表４７－２　「進路」（高校卒業後の進路）×「大樹学」で参考になったこと

		「大樹学」で参考になったこと			合計
		職業体験	ふるさと教育	その他	
進学	度数(人)	12	5	1	18
	内訳(%)	66.7	27.8	5.6	100.0
就職	度数(人)	5	3	0	8
	内訳(%)	62.5	37.5	0.0	100.0
合計	度数(人)	17	8	1	26
	内訳(%)	65.4	30.8	3.8	100.0
大学	度数(人)	9	3	1	13
	内訳(%)	69.2	23.1	7.7	100.0
専門学校等	度数(人)	3	2	0	5
	内訳(%)	60.0	40.0	0.0	100.0
合計	度数(人)	12	5	1	18
	内訳(%)	66.7	27.8	5.6	100.0

高卒後の進路希望（進学か就職か）において、「大樹学」の感想に重点の違いはないと考えて良いと思う。進学時の進路希望（「大学」か「専門学校」か）において、大学進学希望の場合に、「職業体験」が相対的に高いと考えられる（「ふるさと学習」が相対的に低い）。前者より少し強い関係がある。感想が「職業体験」である場合、「ふるさと学習」と比べて、進学先が大学で高く、専門学校等で低い。

これをキャリア教育で「参考になったこと」に替えて検討する（図表４８－１・２）。

図表４８－１　「進路」（中学校卒業後の進路）×キャリア教育で参考になったこと

		キャリア教育 で参考になったこと					
		「修学旅行」			「職業体験」		
		該当	非該当	合計	該当	非該当	合計
町内の高校進学	度数(人)	8	2	10	2	8	10
	内訳(%)	80.0	20.0	100.0	20.0	80.0	100.0
帯広市の高校進学	度数(人)	12	8	20	11	9	20
	内訳(%)	60.0	40.0	100.0	55.0	45.0	100.0
町内、帯広市以外の高校進学	度数(人)	2	1	3	1	2	3
	内訳(%)	66.7	33.3	100.0	33.3	66.7	100.0
十勝圏以外の高校進学	度数(人)	1	3	4	2	2	4
	内訳(%)	25.0	75.0	100.0	50.0	50.0	100.0
高専進学	度数(人)	1	0	1	0	1	1
	内訳(%)	100.0	0.0	100.0	0.0	100.0	100.0
合計	度数(人)	24	14	38	16	22	38
	内訳(%)	63.2	36.8	100.0	42.1	57.9	100.0

中学校卒業後の進路によって、キャリア教育で「修学旅行」を「参考になったこと」にあげる生徒の割合は異なっていると考えられる。「町内の高校進学」が最も高く、「町内、帯広市以外の高校進学」、「帯広市の高校進学」順に低くなり、「十勝圏以外の高校進学」の場合は、かなり低い。修学旅行的な見聞の広め方は、「十勝圏以外の高校進学」の場合は必要ないものと考えられているのではないだろうか。象徴的に言い方が許されるなら、「町内の高校進学」だからこそ「東京が見ておきたい」のである。

キャリア教育で「職業体験」を「参考になったこと」にあげる生徒は、「大樹学」で「職業体験」よりも割合が低い。また、「町内の高校進学」では大きな差となっている。「町内の高校進学」の生徒にとって、「大樹学」に包含される町での「職業体験」は、キャリア教育で行われる「職業体験」（キッザニア等でのそれ）と区別して理解していると考えられる。それ以外では、ばらついていて一貫した傾向は見出せない。

次に、高校卒業後の進路希望によってキャリア教育で「参考になったこと」がどのように違うのかを検討する。

キャリア教育で「修学旅行」を「参考になったこと」にあげるのは、「就職」を希望する生徒で割合がかなり高いと考えられる。進路モラトリアムの意味をもつ進学との差が感じられる。そして進学の場合、大学と専門学校では、それほど差がないと考えられる。

図表４８－２　「進路」（高校卒業後の進路）×キャリア教育で参考になったこと

		キャリア教育 で参考になったこと					
		「修学旅行」			「職業体験」		
		該当	非該当	合計	該当	非該当	合計
進学	度数(人)	8	9	17	10	7	17
	内訳(%)	47.1	52.9	100.0	58.8	41.2	100.0
就職	度数(人)	7	1	8	2	6	8
	内訳(%)	87.5	12.5	100.0	25.0	75.0	100.0
合計	度数(人)	15	10	25	12	13	25
	内訳(%)	60.0	40.0	100.0	48.0	52.0	100.0
大学	度数(人)	6	6	12	6	6	12
	内訳(%)	50.0	50.0	100.0	50.0	50.0	100.0
専門学校等	度数(人)	2	3	5	4	1	5
	内訳(%)	40.0	60.0	100.0	80.0	20.0	100.0
合計	度数(人)	8	9	17	10	7	17
	内訳(%)	47.1	52.9	100.0	58.8	41.2	100.0

キャリア教育で「職業体験」を「参考になったこと」にあげる生徒は、「進学」で割合が高くなっている。これは、進路先を考える際に、進学先は選択可能であるが、就職は選択可能性に乏しいと考えていることに起因すると考えられる。キャリア教育は、就職を考える際に参考にされるのではなく、進学先を考える際に参考にされるということだろう。進学の場合には、よりモラトリアム度が低い（学校選択が職業選択に近く、シビアに考えなければならない）専門学校等の進路希望者で「職業体験」の該当が多いのは頷ける結果となっている。

このような意味で、大樹中学校におけるキャリア教育は行事（「修学旅行」と「職業体験」）で行われるが、最も就職に近い生徒には前者（「修学旅行」）で参考にされ、進路選択のリソースという意味で専門学校等の進学を希望する生徒にとって参考にされる。

（２）地域アイデンティティと「大樹学」・キャリア教育の関係

正の地域アイデンティティであった「穏やかな地域社会」と負の地域アイデンティティであった「消費文化へのアクセスが悪い」が、「大樹学」やキャリア教育の感想とどのような関係があるのかについて検討する。

まず、「大樹学」の感想との関係である。

「大樹学」の目的が、「”ふるさと大樹”に学ぶ活動を通して、”ふるさと大樹”へ誇りをもって　社会に貢献できる人を育てる」であることは前述した。

正の地域アイデンティティである「穏やかな地域社会」は、大樹学の中の「ふるさと学習」で「参考になったこと」の多さとは関係がなさそうである。逆に、「職業体験」」で「参考になったこと」として掲げた生徒が多い。どのように解釈をすれば良いのかは不明である。

図表４９－１　地域アイデンティティ（主要２種）×「大樹学」で参考になったこと

			「大樹学」で参考になったこと			合計
			職業体験	ふるさと学習	その他	
大樹町の良いところL3(穏やかな地域社会)	該当	度数(件)	15	4	0	19
		内訳(%)	78.9	21.1	0.0	100.0
	非該当	度数(件)	13	5	2	20
		内訳(%)	65.0	25.0	10.0	1
合計		度数(件)	28	9	2	39
		内訳(%)	71.8	23.1	5.1	100.0
大樹町の良くないところL2(消費文化へのアクセスが悪い)	該当	度数(件)	17	4	2	23
		内訳(%)	73.9	17.4	8.7	100.0
	非該当	度数(件)	10	4	0	14
		内訳(%)	71.4	28.6	0.0	100.0
合計		度数(件)	27	8	2	37
		内訳(%)	73.0	21.6	5.4	100.0

負の地域アイデンティティである「消費文化へのアクセスが悪い」は相対的に「参考になったこと」として「ふるさと学習」の割合の低さと関係していると考えられる。しかしながら、これも事例数が少なく決定的ではない。この点を除けば、地域アイデンティティの正負と、「大樹学」の感想との関係は弱い。

「大樹学」をキャリア教育に替えて検討する。

図表４９－２　地域アイデンティティ（主要２種）×キャリア教育で参考になったこと

			キャリア教育 で参考になったこと					
			「修学旅行」			「職業体験」		
			該当	非該当	合計	該当	非該当	合計
大樹町の良いところL3(穏やかな地域社会)	該当	度数(件)	12	6	18	7	11	18
		内訳(%)	66.7	33.3	100.0	38.9	61.1	100.0
	非該当	度数(件)	12	7	19	8	11	19
		内訳(%)	63.2	36.8	100.0	42.1	57.9	100.0
合計		度数(件)	24	13	37	15	22	37
		内訳(%)	64.9	35.1	100.0	40.5	59.5	100.0
大樹町の良くないところL2(消費文化へのアクセスが悪い)	該当	度数(件)	12	9	21	10	11	21
		内訳(%)	57.1	42.9	100.0	47.6	52.4	100.0
	非該当	度数(件)	10	4	14	5	9	14
		内訳(%)	71.4	28.6	100.0	35.7	64.3	100.0
合計		度数(件)	22	13	35	15	20	35
		内訳(%)	62.9	37.1	100.0	42.9	57.1	100.0

正の地域アイデンティティである「穏やかな地域社会」は、「修学旅行」で「参考になったこと」の割合の高さとは関係がない。同様に「職業体験」で「参考になったこと」の割合が高さとも関係がない。すなわち、正の地域アイデンティティはキャリア教育で「参考になったこと」に関わらない。

負の地域アイデンティティである「消費文化へのアクセスが悪い」に該当する生徒は（非該当の生徒に比べて）相対的に、「修学旅行」で「参考になったこと」の割合が低い。キャリア教育に位置づけられた修学旅行は、ある意味で「修学旅行的」ではない。一種の研修旅行である。その点が、「消費文化へのアクセスが悪い」という負の地域アイデンティティをもつ生徒の支持を下げている可能性がある。しかしながら、これも事例数が少なく決定的ではない。逆に「職業体験」で「参考になったこと」は相対的に割合が高い。キャリア教育を役割の点で理解しているのだろうか。

全体として、負の地域アイデンティティである「消費文化へのアクセスが悪い」は、キャリア教育で「参考になったこと」に多少の関係がありそうだ。しかしながら、全体として地域アイデンティティの正負と、キャリア教育の「参考になったこと」との関係は弱い。

（３）将来の居住地志向と「大樹学」・キャリア教育の関係

本節の最後に確認しておくのは、将来の居住地志向との関係である。

最初に、「大樹学」で参考になったこととの関係を検討する。図表５０－１がそれである。

図表５０－１　「将来の居住地志向」×「大樹学」で参考になったこと

		「大樹学」で参考になったこと			合計
		職業体験	ふるさと学習	その他	
ずっと大樹町に残る	度数(件)	3	1	1	5
	内訳(%)	60.0	20.0	20.0	100.0
いったん大樹町は出るが戻ってくる	度数(件)	5	3	0	8
	内訳(%)	62.5	37.5	0.0	100.0
大樹町からは出るが十勝には残る	度数(件)	12	2	0	14
	内訳(%)	85.7	14.3	0.0	100.0
十勝を出て戻ってこない	度数(件)	5	2	1	8
	内訳(%)	62.5	25.0	12.5	100.0
まだ決まっていない	度数(件)	1	0	0	1
	内訳(%)	100.0	0	0	1
合計	度数(件)	26	8	2	36
	内訳(%)	72.2	22.2	5.6	100.0

「大樹学」は将来の居住地志向と少し関係していると考えられる。

「いったん大樹町は出るが戻ってくる」場合、「参考になったこと」に「ふるさと学習」をあげた生徒の割合は高い。「ずっと大樹町に残る」場合、「参考になったこと」に「ふるさと学習」をあげた生徒の割合が高くないこととの差が興味深い。そして、「大樹町からは出るが十勝には残る」場合、「参考になったこと」に「ふるさと学習」をあげた生徒の割合は低い。しかしながら、「十勝を出て戻ってこない」という生徒にとっては、あまり関係ない。すなわち「ふるさと学習」は、十勝圏における将来の居住地志向に関係するのである。それを超えての効果はあまり大きくないと思われる。

図表５０－２　「将来の居住地志向」×「キャリア教育」で参考

		キャリア教育 で参考になったこと					
		「修学旅行」			「職業体験」		
		該当	非該当	合計	該当	非該当	合計
ずっと大樹町に残る	度数(件)	3	1	4	1	3	4
	内訳(%)	75.0	25.0	100.0	25.0	75.0	100.0
いったん大樹町は出るが戻ってくる	度数(件)	5	3	8	5	3	8
	内訳(%)	62.5	37.5	100.0	62.5	37.5	100.0
大樹町からは出るが十勝には残る	度数(件)	10	4	14	4	10	14
	内訳(%)	71.4	28.6	100.0	28.6	71.4	100.0
十勝を出て戻ってこない	度数(件)	5	2	7	2	5	7
	内訳(%)	71.4	28.6	100.0	28.6	71.4	100.0
まだ決まっていない	度数(件)	0	1	1	1	0	1
	内訳(%)	0.0	100.0	100.0	100.0	0.0	100.0
合計	度数(件)	23	11	34	13	21	34
	内訳(%)	67.6	32.4	100.0	38.2	61.8	100.0

「ずっと大樹町に残る」場合、「参考になったこと」に、「修学旅行」をあげる生徒の割合は少し高い。これは、「大樹町からは出るが十勝には残る」の場合や「大樹町を出て戻ってこない」場合も同様である。

しかし、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」場合、「参考になったこと」に「修学旅行」をあげる生徒と「職業体験」をあげる生徒の両方の割合が高く、拮抗している（両方答えた生徒がこの類型に多いから)。この類型の生徒の場合、大樹町から出て再び戻ってくる（往復）ことを考えなければならない。そして、出たときに何を修めるのか、そして戻ることを可能にするためには、町にはどのような職業があるのかを知っておくことが重要なのではないだろうか。

すなわち、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」という将来的な居住地の移動（往復）を希望する生徒にとって、モチベーションと経験を得る点で資するものとして、「大樹学」とキャリア教育は意味をもっていると考えられる。

第３章　まとめにかえて――キャリア教育を「人生探究」にバージョンアップする

ここまで、調査結果を「概要」（第１章）と「考察」（第２章）の二部構成で説明をしてきた。詳細なまとめは割愛させていただき、調査結果の特徴を何点か指摘する。その上で、地方の中学生がもつ負の地域アイデンティティの核（「消費文化へのアクセスが悪い」）に抗う実践を、キャリア教育の変更提案として主張し、まとめにかえる。

第１に、生徒の正負の地域アイデンティティの構造を明らかにした。生徒の自由記述の意味の「カオス」を、コード化の技法を用いたラベルの作成とラベル間の関係を検討し、「模式図」として整理した（図表３９）。

内容としては、負の地域アイデンティの核（「消費文化へのアクセスが悪い」）が全体の基調を形成し、正の地域アイデンティティの主要なものはそれと併存し、抗するものではない点が明確になった。ただし、主要ではないが、重要な質をもった正・負の地域アイデンティティがあった。後述する提案の根拠となる。

第２に、生徒の進路希望を多面的な観点から整理し、将来的な生活圏の構想（将来の居住地志向）を軸に、個別の進路選択が意味づけられていると考えた。

特に、筆者のこれまでのオホーツク総合振興局管内や上川総合振興局管内の中学校の生徒調査と異なり、十勝圏という地理的なまとまりが大きな意味をもっていることが明らかになった。大学も含めた進路だけでなく、働くことも考えた将来展望がこの圏域で包摂しうることが、生徒の将来的な生活圏構想に見通しを与えることになっている。

第３に、この両者と関わる形で、中学校の「大樹学」と強力なキャリア教育の生徒への影響が形作られていた。

「大樹学」とキャリア教育は、全体として生徒の進路を明確にするという点で力になっていた。中学校卒業後の進路と「大樹学」で「参考になったこと」はあまり関係がない。キャリア教育の「参考になったこと」は関係する。

キャリア教育は行事（「修学旅行」と「職業体験」）で行われるが、就職に時期的に最も近い生徒（高卒後、就職を希望する）には前者（「修学旅行」）で参考にされ、進路選択のリソースという意味で専門学校等の進学を希望する生徒にとって参考にされる傾向にあった。

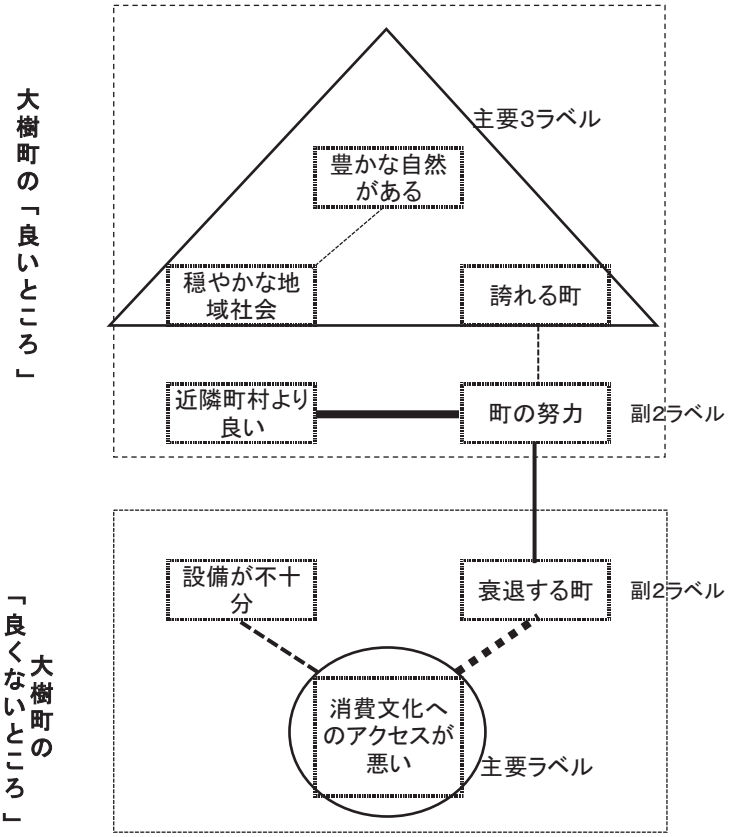
多数が十勝圏という地域的なまとまりで収斂する将来の生活圏の構想の中で、「いったん大樹町は出るが戻ってくる」という将来的な居住地の移動（往復）を希望する生徒にとって、モチベーションと経験を得る点で資するものとして、「穏やかな地域社会」という正の地域アイデンティティと、「大樹学」とキャリア教育の実線は意味をもっていると考えられた。他方で、「消費文化へのアクセスが悪い」という負の地域アイデンティの核は、生徒の将来志向に十勝圏の「引力」と共にそこからも引き剥がす「遠心力」として影響している。

生徒にとってキャリア教育は、職業にフォーカスして理解されてはいないと考える。地方での生活経験を拡げるという意味で重要であった。これは、現在のキャリア教育が将来の職

業にフォーカスすることで学習モチベーションを調達する手段に限定されていることを越える潜在的な要求に応える必要がある、という筆者の提案を（少し）支持する。職業に寄せすぎたキャリア教育を、それも含めた生活に、将来のことを考えるなら「人生」に拡張する必要がある。

さらに、この構想を新しいキャリア教育のアイデアとして具体化するために、図表３９を再掲して、考えることにしたい。

図表５１　図表３９の再掲(地域アイデンティティの構造（模式図））



※　有為確率に応じて線の太さを、関係の正／負を実線／点線で表記した。

【関係があるラベルと対応する有為確率】

「豊かな自然がある」×「穏やかな地域社会」:Fisher の直接法(両側) p=.333

「町の努力」×「誇れる町」:Fisher の直接法(両側) p=.278

「町の努力」×「近隣町村より良い」:Fisher の直接法(両側) p=.002

「町の努力」×「衰退する町」:Fisher の直接法(両側) p=.076

「消費文化へのアクセスが悪い」×「衰退する町」:Fisher の直接法(両側) p=.006

「消費文化へのアクセスが悪い」×「設備が不十分」:Fisher の直接法(両側) p=.089

「消費文化へのアクセスが悪い」と負の関係にある（これを減ずる可能性がある）のは、「衰退する町」（危機感）であった。これは、「町の努力」と正の関係にある。ここを強めるという構想である。より具体的に提案してみる。

生徒にとって「町の努力」は、「自分事」（努力）とは重なっていない。ここを重ねる形で「ふるさと学習」が行われる必要があるだろう。大樹町は、以前、小学校においてこの点で「子ども議会」（町での生活問題を議論し、提案を考える）を行っていた。現在は、それが高校にシフトして「高校生議会」として行われている。しかし敢えて言うなら、高校生はある意味で生活圏の将来構想の選択の一次段階を終えている。高校存続のことを考えるなら、中学生でこそこの実践は重要だと考えられる。高校になると、自町出身の高校生は少ない。他町出身の生徒が大樹町と議会に参画することを意味づけためには、「地域横断的な想像力」を喚起する仕掛けが必要である。

さらに、「消費文化へのアクセスが悪い」と負の関係がある２つの負の地域アイデンティティ、「衰退する町」（危機感）と「設備が不十分」には関係性がない。「設備が不十分」だという言わば町批判を、町振興の建設的な批判に育てる取り組みは重要である。この意味でも、「高校生議会」を取り組む価値がある。

そして、「誇れる町」という正の地域アイデンティティを、「大人がやっていることでしょ」という他人ごとの評価でなく、自分のコミットメントを介したからこそ「誇れる町」であるという自信に転換することを目指す。

生徒が大樹町だから「できること」にあげていた「社会的取り組みの体験」（図表２６）は、教育実践によって媒介されたものであった。この「お膳立てされた体験」を、「自分事」の参加や探究に変換するという新たな教育実践を構想すべきである。

全体として、中等教育における「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」が、進路指導・キャリア教育（行事）のために無効化していたこれまでの歴史と決別する必要がある（浅川［2020］）。「後退期」の現代日本において、さらに「人口減少する」地方において、キャリア教育（それが職業を知るものであっても）が、生徒の学習（入試）のモチベーションを喚起する手段に制限されたままでは、「未知の未来」を探究する「器」（素材）として、決定的に役不足である。現状を漫然と放置すれば、図表３５で説明したように、中学生にとっての「未知の未来」は、現在の生活の維持（「気まま」で、「満たされた」、「波瀾のない」生活）としてイメージされてしまう。それが問い（「いつまで続くと考えるのか」、「どんな意味があるのか」、「それは善い生活なのか」）に付されることはない。

キャリア教育は、新しい学習指導要領を貫く精神を体現する探究系科目群のひとつ、「人生探究」として拡張されなければならない。「未知の未来」と「善い人生」という答のない問いを、生徒同士や教員と共に深めるものに替える。そのことで、生徒にとって自明の負の地域アイデンティ（「消費文化へのアクセスが悪い」）を問いに付す。

これらの構想の具体化を、これ以降も検討したいと考えている。

【参考文献】

浅川和幸、2010、「北海道におけるキャリア教育の現状と課題」、『教育学の研究と実践』（北海道教育学会）、第５号、29-46 頁

浅川和幸、2019、「大学生の「学び」を支える考え方の現状と課題:大学生は自分の「教育キャリア」をどのように振り返ったか」、『教育学の研究と実践』（北海道教育学会）、第１３号、13-18 頁

浅川和幸、2020、「「人口減少社会」における「総合的な探究の時間」の構想と実践の課題：（教職課程）「新聞づくりを生かしたシティズンシップ教育」を素材に」、『教職課程年報』（北海道大学）、第 10 巻、1－71 頁

木下康仁、1999 年、『グラウンデッド・セオリー・アプローチ　質的実証研究の再生』、弘文堂

熊沢誠、2006、『若者が働くとき　「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』、ミネルヴァ書房

河野哲也編、2020、『ゼロからはじめる　哲学対話　－　哲学プラクティス・ハンドブック』、ひつじ書房

児美川孝一郎、2013、『キャリア教育のウソ』、ちくまプリマー新書

髙橋亜希子、2007 年、「質的・量的分析を組み合わせた仮説生成――総合学習、達成要因へのアプローチ――」（秋田喜代美、『はじめての質的研究法　教育・学術編』、東京図書所収）

土井隆義、2019、『「宿命」を生きる若者たち　格差と幸福をつなぐもの』、岩波ブックレット

待鳥聡史、2020、『政治改革再考―変貌を遂げた国家の軌跡―』（新潮選書）、新潮社、Kindle 版

森田伸子、2011、『子どもと哲学を　問いから希望へ』、勁草書房

M. R. グレゴリー／J. ヘインズ／K. ムリス編、2020、『子どものための哲学教育ハンドブック　世界で広がる探究学習』、東京大学出版会

謝辞

筆者（浅川）が大樹町を始めて訪れたのは、2019 年の 7 月になります。それから、もう少しで 2 年になります。この間、世の中には大きな変化がありました。この報告書の作成遅れは筆者の責任に因るところですが、「コロナ禍」も少し関わっています。

ところで、この間筆者の進めてきた調査研究は、「人口減少時代」や「自治体消滅」と言われる日本社会の大きな変化のもとで、課題先進地である北海道における地方の教育問題を、若者（中学生・高校生だけではなく、様々な産業の若手労働者も含めて）を対象として考えてきました。若者（彼ら／彼女ら）の地域との関係（コミットメント）や地域の担い方の社会的・文化的背景、その困難と潜在的な可能性について考察することが課題です。

2013 年から 2018 年の 6 年間は、中等教育の教育実践と生徒の地域アイデンティティとの関係をオホーツク総合振興局管内、上川総合振興局管内の中学校・高校において調査研究を行ってきました。それと関わる形で、学校を取り巻く環境としての主要な産業や、そこで働く若手担い手の将来志向の動向について検討を重ねてきました。

その総括としては、中学生や高校生にとって地域を学ぶ「ふるさと学習」実践は重要なものではあるが、その効果は複雑な影響をもつということでした。現在の日本社会は、地域格差が歴然としてある上に、中学生・高校生が学校外も含めた生活における自由を探究するフィールドは、市場（消費やインターネット・SNS 等）に偏っています。地域社会にコミットメントする（「肩入れ」して関わる）経験は、主に学校経由になってしまいます。

特に、日本社会においては、中高生は学生であり、「大人未満」の保護された存在、受験勉強に専心する存在として理解され、地域社会の「若き担い手」として遇される訳ではありません。このこともあって、ほとんどの中高生は保護者家族の関係の中でしか地域社会を知りません。保護者家族の生活が地域に根がない場合には、住んでいても「無知」である場合も多いと思います。そのため、「ふるさと学習」実践をしても、「作り物」の経験しかもてません。同時に、「若き担い手」（地域民主主義の担い手として）としての関与に相応しい権力と責任をもつ理由（原因）がありませんので、責任感を発達させようもありません。すなわち、コミットメントがなく、パワーがないなのですから、地域アイデンティティをもつ基盤がないのです。それでも、「ふるさと学習」実践の一部では、「食」や修学旅行を利用した町の PR への貢献活動への参加を通して、育むことに成功している場合もありました。

このような総括から、もっと中学生・高校生が地域社会にコミットメントする経験、そこでパワーを発揮する経験を教育実践として取り組んでいる（取り組もうとしている）事例に注目して、それが中学生・高校生の「消費者性」をどのように変革可能なのかについて研究することに歩を進めたいと考えました。

大樹町を含めた十勝地方は地方自治の伝統も厚く、それが歴史的に関わるのだと思いますが、中等教育における教育と議会の教育連携、典型的には大樹高校で行われている「高校生議会実践」があります（お隣の広尾町でも「高校生議会実践」を行っております）。それ

に学ぶことを考えて、大樹町にお邪魔した次第です。

この間、このような考え方で研究を進めてまいりましたが、2020 年初頭からの「コロナ禍」によって、研究の停滞が生じております。2019 年度に貴中学校で行わせていただいた大樹町の一貫した「ふるさと学習」実践（最終段階が「高校生議会実践」）に関する中学 3 年生のアンケート調査の結果について、それをまとめることも同様に停滞しておりました。遅くなりまたが、この度やっと中学生調査を報告書という形でまとめることができてました。教えていただくことができたことのうち、まだお返しできるものは少ないですが、ご報告申し上げます。

この報告書が、大樹中学校の実践や、大樹町の教育に少しでも参考になることがありましたら、それに過ぎる幸福はありません。

最後になりましたが、貴重な勉強の機会をくださいました大樹中学校の宮村孝雄校長と小林亮教頭、調査を実施してくださった佐藤彰良先生（現、旭川市立六合中学校）、調査にご協力くださった中学３年生の皆様に、心から感謝いたします。

拙い報告書ですが、これからも精進しより良いものとすることで、大樹町を始めとした小規模自治体と、北海道の中等教育の発展に貢献したいと考えています。

北海道大学大学院教育学研究院
教授
浅川　和幸

令和元年度大樹中学校３年生の生活・将来志向・地域アイデンティティに関するアンケート調査

責任者：北海道大学教育学研究院
教授　浅川和幸

○この調査の趣旨とプライバシーの配慮（秘密厳守）について

私たちがこの調査を行う目的は、中学生が、将来やふるさとについて考えていることを知ることにあります。これまで、「地方の若者は（中学生も）都市に出たがっている」と多くの人に思われてきました。地方は不便であると頭から信じていることや、地方で暮らしていくことの魅力は外から見るだけではなかなか気付かないことが背景にあります。私たちは、この調査を通して、大変さも含めて、その魅力をみなさんから教えていただきたいと思っています。

ただ、こんなことを書くと、「地域に残りたい」と書かなくてはいけないかなと思うかもしれませんが、そんなことはありません。「都会に出ていろんなものを見てみたい」という人がいれば、そう書いてください。私たちは、地方には都会に出たい人ばかりではなくて、地域に残りたい生徒もいるということを踏まえて、その双方にとって意味のあるようなこれからの学校のありかたを考えたいと思っています。そのため、いまのありのままの気持ちを書いていただけると、ありがたいです。

プライバシーの保護には十分配慮し、回答していただいた内容につきましても、厳重に管理いたします。また、答えたくない内容や分からないものに関しては、空欄のままで結構です。書ける範囲で書いてください。

１．基本的なことについて

質問１　いずれかに○を付けてください。　　男　・　　女

質問２　保護者の職業を教えてください。　（　　）
※　公務員，会社員，自営業という書き方でも結構です。

質問３　学校生活で中心に置いていることに、ひとつだけ○を付けてください（**勉強・友人関係・部活**）。
補質問　またそれを選んだ理由を教えてください。

２．地域への気持ちについて

質問４　これまで「大樹学」の授業・行事をうけてきたと思いますが、感想を教えてください。一番印象に残ったものについて教えてください。
※　小学校の時の、漁業体験、稚魚放流体験、「子ども議会」、「農園活動」、「中島酪農祭」、中学校の時の「キャリア教育」、「職業体験」等。これ以外でも大丈夫です。

質問５　中学校でのキャリア教育で、一番印象に残ったものや、自分の進路を考える上で参考になったことがあれば教えてください。
※　１年生の時の「ジョブシャドウウイング」、２年生の時の「職業体験学習」、３年生の時の「修学旅行」等。

質問６　大樹町のことをどう思っているのか、ひとつだけ○を付けてください。（**好き・半々・嫌い**）
補質問　その選択肢を選んだ理由はなぜですか。

質問７　大樹町の、「良いところ」と「良くないところ」を教えてください。
（「良いところ」はどこですか）

（「良くないところ」はどこですか）

質問８　大樹町にいるからこそできること、できないことを教えてください。
（できることは何ですか）

（できないことは何ですか）

質問９　大樹町の主な産業は「農業（畜産業、畑作）」と「漁業」ですが、それぞれの仕事についての印象を教えてください。
（農業について）

（漁業について）

質問 10　将来的に大樹町を出ていくつもりですか。下の中から１番近いものに〇を付けてください。
（「１．ずっと大樹町に残る」、「２．いったん大樹町は出るが戻ってくる」、「３．大樹町からは出るが、十勝には残る」、「４．十勝を出て戻ってこない」）
　補質問　その選択肢を選んだ理由を教えてください。

質問 11　住むならこのまちが良い、遊ぶならこのまちが良いというものがあれば教えてください。
住むなら（　　）　遊ぶなら（　　）

質問 12　あなたが地元（身近に感じる場所）だと思う範囲はどこですか。下の中から一番近いものに〇を付けてください。
（大樹町よりも狭い範囲、大樹町、大樹町の周辺も含めたよりも広い範囲）

「大樹町よりも狭い範囲」と「大樹町よりも広い範囲」を選んだ場合は、どの範囲かを教えてください。

３．将来志向について

質問 13　中学校卒業後の希望進路について，〇を付けてください。
（「１．町内の高校進学」、「２．帯広市の高校進学」、「３．１・２以外の十勝の高校進学」、「４．十勝圏以外の高校進学」、「５．高専進学」、「６．就職」

質問 14　高校卒業後の進路希望を教えてください（具体的に）。
　進学の場合（　　）、就職の場合（　　）

質問 15　進路に関して、保護者から言われていること（アドバイス）があれば教えてください。

質問 16　将来なりたい職業があれば教えてください。　（　　）
　補質問　なりたい理由を教えてください。

質問 17　将来どのような生活がしたいかを教えてください（なるだけ具体的に）。

最後まで書いてくれて、本当にありがとうございました！！

平成 31～33 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）（研究課題番号　19K0246809）「人口減少時代における地方発参加型教育実践の比較研究による新しい中等教育原理の探究」研究報告書 1

大樹学校調査報告書　「地域学習」・キャリア教育と地域アイデンティティ

研究代表者　浅川和幸

連絡先　〒060-0811　　札幌北区北 11 条西 7 丁目
北海道大学大学院教育学研究院
℡・fax　011-706-2604

令和 3 年 4 月 2 日発行
印刷　北海道印刷企画株式会社
℡　011-562-0075